



思錄



## 原序

予敢て本書に序せず。本書自ら己の爲に言ふべし。書中録する所のものは余が深く己を省み自ら験する時、就中祈禱の時、於て万民を啓發する神の神かみよりして我が靈に賜はりたる恩寵的光照に外からず。間あれば、予恩寵的思想と感情とを録し、多年の此記録よりして、今乃ち本書を編纂したるあり。本書の意義の甚だ多端あるは讀者の見る所の如し。若しそれ本書の趣味に至りては讀者の批判に一任せん。屬神者無所不度而已。不

爲人所度(哥林多前書  
三章十五節)

プロトイェレイ  
長司祭 イオアン、セルギエフ

小引

一、本書は高德の聞えある露國クロンシタットの長司祭イオアン、イリイ  
チ、セルギエフ、師の著として師の著書中最も興味ありと稱せらるゝ傑  
作なり。師は特よ一千八百九十三年聖彼得堡再版の原書を主教尼閣  
頼師に贈らる。余は乃ち此再版の原書を就て翻譯したり。  
一、正教新報に『約翰神父隨感隨筆』と題して掲載せし所のもの亦此書よ  
り抄譯したるなり。

明治三十三年八月

市谷僑居に於て

上田 將識す

靜思錄

露國クロンシタット長司祭

イオアン、セルギエフ述

○主よ爾は爾の眞理と爾の公義とを豊よ我よ開示せり爾は科學よて  
 我を啓發して信と萬有と人智の濶奥を悉く我よ開示せり我は爾の言  
 — 吾人の神と靈とを剖き貫く(希伯來四の十二)愛の言 — を識り人  
 智の法則とその哲理を慕ふ事と辨舌の構造と美とを研究し、森羅萬象  
 の機微と其の法則并よ世界創造の妙理と世界廻轉の法則にも粗通曉  
 し、地球の殖民、遠國の民、著名の人物を知り此の世よ新陳代謝したる彼

等の言行を知り又己れを知り爾も近づくの大學問をも粗知得し一言  
 以て之を云へば我が知り得たる所多々ありて人間の智識多く我も開  
 示せられシラフ三の廿三向後又我が知り得べきの事物極めて多から  
 ん。諸種の書亦多く我が座右に在り我之を一讀二讀三讀すと雖も猶未  
 だ壓らず我が靈は猶益知識を渴望し我が心猶満足せず猶飽かず我が  
 智よて得たる諸の知識よ由りて未だ完全なる幸福を得る能はず我が  
 心の壓るは果して何れの時よ在るべきか。我は爾の榮の現はるを見  
 て壓らん(聖詠十六の十五)。其時よ至るまでは我壓らず救主曰く「凡て  
 此水(世の知識)を飲む者は復た渴かんされど我が與ふる水を飲む者は  
 永く渴くことなし且我が予ふる水は其中よて泉となり湧出で、永生

○汝は常よ主を在らざる所なきの智有生有力の言施生の神として己  
 の前よ看るの方を知るか。聖書は是れ智と言と神——聖三者たる神——の  
 領分なり彼は之よ於て明々白々よ表顯す主曰く「我が汝等よ語る所の  
 言は靈なり生命なり」と(約翰六の六十三)。諸聖父の書は是れ復た三者  
 たる意思と言と神の表現なれども既よ人間の靈の大よ混和したるも  
 のなり而して普通世人の書よ至りては罪よ陥りたる人間の靈魂の罪  
 の癖と習慣と慾情との相混じて表顯したるものなり。神の言(聖書)よ於  
 て吾人は面のあたり神を靚又己の如何なるかを見るなり人々よ宜し  
 く彼よ就きて己を省み常よ神の在ます前よ在るが如くよして歩むべ  
 し。

に至るべし(約翰四の十三、十四)

○聖人は如何にして吾人を見、吾人の需むる所を知り、吾人の祈禱を聴くか。請ふ譬を取らん。試よ汝等大陽は移されて大陽と合したりと假定せよ。大陽は光線を以て地球を照し、地上の微々たる細砂も之が光を受けざるなし。汝等亦此の光線を以て地を見るならん、されども汝等の大陽は對して微々たること猶夫の一光線の如くならんのみ而も此の光線の多き勝て敷ふべからず。此の光線は大陽と同一なるを以て、大陽の世界を照すことに密接に相與かるものとす。聖なる靈魂も亦是の如く靈妙の大陽たる神と合し、此の全世界を照す、靈妙の大陽の媒介よりて總ての人を見、祈禱する人の需要を知るなり。

○汝等の知る如く人は其言ふ於て死せざる者なり、人は實に言語に於て不死にして死後と雖も亦言ふなり。吾死すといへども死後亦必ず言はん。夫の夙に死せし人々の此の世に遺して往々全國民の口は活きつつある。不死の言は果して幾何ぞ人の言といへども其の活氣あることそれ斯の如し。況んや神の言をや、彼は幾世を経るも常に活きて且効力あり。

○夫れ神は生々活潑造化の意思なり故に凡そ己の靈の意思よて此聖三者の意思よ遠ざかり獨り朽つべき物質的の事物のみ耽り之は由りて己の靈魂を物質的に化する者は其罪や大なり、就中奉神禮又は家裡の祈禱の時己の意思を全く他に傾け、聖堂外の諸所よ之を彷徨する

者は罪殊ゝ重し。彼等は吾人の意思を飛揚して到達せしむべき神性を侮辱するや極て深し。

○齋と祈禱は如何なる結果を呈するか。勤行は果して何の爲めぞ。他なし吾人の罪を清め心霊を安穩よし。神と體合せしめ其義子たらしめ神の前は毅然たらしむるなり。齋を守り誠心痛悔するの理由此に在るなり。随意的の勤行は對する報酬は無量なり。夫れ吾人の中神は對して子たるの情を懐く者果して多く之れあるか。吾人の中勇を以て罪を獲ずし。在天の神父を頷ひ『我等の父よ……』と唱ふる者果して多きか。否。反て吾人の心中は斯世の俗塵若くは物慾に戀々たる情に壓せられて斯かる子たるの聲は聞えざる。非ずや。在天の父の吾人の心を去る豈遠

き。非ずや。彼を離れて遠き國に去りたるの吾人は自ら彼を以て復讐の神と想像すべき。非ずや。然り吾人は實に己の罪に由りて當然彼の義怒と罰を受くべきものなる。彼が斯く屢々吾人を容忍し彼が吾人を果を結ばざる無花果樹として斫り棄てざるは豈怪むべき。非ずや。吾人は須く速に痛悔と熱涙とを以て彼の怒を宥むることを力めん。吾人は宜く自ら己を省み嚴肅に己の不淨なる心を驗して如何に夥多の不淨不潔が之に神の恩寵の入る途を壅塞するかを見。吾人が心靈的の死者たるを悟了せん。

○我を愛するの主は此に在り。吾焉ぞ憎惡の影たりとも我が心に入るを許すべけんや。凡そ憎惡なるものは須く全く我が衷に死すべし。我が

心は宜く善の馨よて馥郁たるべし神の愛は我儕不品行の者を憎悪よ  
教唆するの汝撒但よ勝たん憎悪は靈魂の爲よも肉体の爲よも甚しく  
害あり彼は焼殺し壓迫し苦むるなり凡そ憎悪よ束縛せらるゝ者は決  
して愛の神の寶座よ近づくことを敢てすべからず。

○吾人は祈禱するよ當りて心を我が權よ掌握し以て之を主よ向はし  
めざるべからず我が心をして冷淡狡猾不實首鼠兩端ならしむるべか  
らず然らずば吾人の祈禱吾人の齋よりして何の益をか得ん「此の民は  
口よて我よ近づき舌よて我を敬へども其心は我よ遠ざかる」馬太十五  
の八といへる忿怒の聲を主より聞く豈可ならんや夫れ然り故よ吾人  
の聖堂よ立つや必ず放心せず乃ち各其靈を熱して以て主よ事ふべし

吾人が冷淡の心を以て習慣よ由りて執る所の勞は人之を重しとせず  
神の欲する所は實よ吾人の赤心よ在り曰く「我が子よ汝の心を我よ予  
へよ」と箴言廿三の廿六何となれば心は人間の最も重要なものよし  
て其生命なればなり更よ極言せば心は乃ち人なり故よ凡そ神よ祈り  
或は神よ事ふるよ赤心を以てせざる者は全く祈らざるよ同じ何とな  
れば祈る者は肉体のみよして其肉体たるや靈魂なければ地と異なる  
なければなり汝は立て祈禱するよ當り諸の智を有する神の前よ立つ  
と想像せよ故よ汝の祈禱は悉く精神的たり又悉く智識的たらざるべ  
からず。

○神の聖人は死後と雖も尙活く吾は聖堂よ於て屢神の母がその伯母



エリサウエタの家にて神使長の福音を得たる後作りたる感嘆措く能はざる美妙の靈歌を謳ふを聞く。吾又モイセイの歌、前驅の父ザハリヤの歌、預言者サムイルの母アンナの歌、三童子の歌、マリアムの歌を聞く。今に至るまで神の全教會の耳を樂ましむる新約の聖なる詠歌は果して幾何ぞ奉神禮は如何機密は如何儀式は如何彼處は躍々活動して吾人の心を感動するものは果して誰の精神ぞ他なし主神の神及び神の聖人の靈なり。視よ是れ人間の靈魂不死の明證なり。此の人々は死して死後猶吾人の生命を支配する如く彼等は死して後今日に至るまで言ひつゝ吾人を教誡薰陶感動するなり。

○呼吸は身体は必要欠くべからずして、呼吸絶ゆれば人生活する能はざるが如く、靈魂も亦神の神の呼吸よ由らざれば眞誠の生命にて生活する能はず神の神の靈魂よ於けるは猶空氣の身体よ於けるが如し、空氣は稍神の神よ髣髴たるものなり。「神は己がまゝに吹く」(約翰三の八)

○汝罪は誘はれんとする時は罪は夫の不法を惡む主の怒りを招ぐこと甚しきを想像せよ。「爾は不法を喜ばざる神なり」(聖詠五の五) 汝猶能く此の理を悟らんとせば茲は律義嚴格の父あり深く其家族を愛し百方力を竭して其子を品行方正廉直の者と爲さんと欲し品行端正なるに於ては多年の勞を積み作りたる所の富を譲らんとするも子は父の愛に背きて之を愛せず父の愛情を以て蓄積したる資産を顧みず放肆淫逸自ら滅亡を招かんとし慈父憂悲措く能はずと想像せよ。而も罪

は皆是れ靈魂の爲めの死なる(雅各一の十五以下)を記憶せよ彼は靈魂を亡ぼし吾人を凶殺者たる魔の僕と爲すよ因る而して吾人罪の役せらるゝこと深ければ翻然正し歸ることも亦甚だ難く吾人の滅亡亦益疑ひなからんとす汝須く全心全意を竭して凡ての罪を懼れよ。

○汝の心奸惡の思慮よ傾き奸惡者は汝の心を覆し之をして全く信の岩より離れしめんとするときは心窓よ予は我が心靈上究乏よして信よ由らざれば我の微々として有るなきが如きを知ると曰ひ且つ自ら言ふべし我は微弱よしてハリストスの名よ由りてのみ僅よ生活し之れよて自ら慰め自ら悦び心の快活を覺ゆるも彼れよ由らざれば心靈上の死者よして心恒よ安からず心中惘々鬱々たり主の十字架なかつ

せば我は疾よ最も慘憺たる憂悲失望の犠牲たりしならんハリストスは我をして生を保たしむ十字架は我の安慰なり我の慰藉なりと。

○吾人の思慮するを得るは夫の無限の意思(神)の存在するが故よして猶空々漠々たる空間あるが故よ呼吸するを得るが如し是れ或事物よ就きて好思想の起るときは之を感應と稱する所以なり吾人の意思は常よ夫の思慮する無限の神の存在よつれてのみ發動するなり故に使徒輩曰く「我儕己よ由りて自ら何事をも思ひ得るよ非ず我儕の思ひ得るは神よ因れり」と(哥林多後書三の五)故よ救主も謂て曰く「如何に何を言はんと思ひ煩ふ勿れ其時言ふべきことは汝等よ賜はるべし」と(馬太十の十九)視よ意思も言語其者感應さへも外より吾人よ來るを但し此

事たる人の恩寵は満被する時と必要の場合を指して云ふのみ然るに  
 通常の情態は於ても善良なる思想は皆是れ守護神使及び神の神より  
 來るものとして不淨闇昧なる思想は之より反して吾人の傷害せられた  
 る本性と常々吾人は蟠居する魔鬼より吹き込まるゝなり。さらばハリ  
 ステイアニンたる者は如何に己を處すべきか神自ら吾人の衷に作用さ  
 つゝあり(腓立比二の十三)要するに吾人は世界到る處に於て意思の國  
 あるを見る即ち有形世界總体の組織に於ても又之を小にしては此世  
 に於て地球の廻轉及び生活に於て光風水火土の元素の配置方(冥々裡  
 の)に於て之を見る而も他の元素は鳥や蟲や獸や人間の如き諸動物の  
 奥妙にして秩序整然たる構造とその才能行爲若くは習慣も又植物の

構造培養等も普及せられ一言以て之を云へば到る處として意思の國  
 を見ざるなく夫の無心の石や砂に於ても之を見るなり。  
 ○神の司祭等も汝等信仰を以て憂心忡々たるハリステイアニンを慰め  
 つゝその憂悲の床を化して歡樂の牀と爲し自ら視て世の最大不幸者  
 とするの彼を化して最大幸福の者と爲し彼をして今少しく罰せられ  
 て死後至大の恩澤を被むらんとするを信せしめよ(智慧書三の五)然ら  
 ば汝等は人間の友と爲り慰籍の天使と爲り慰撫者たる聖神の機關と  
 爲らん。  
 ○若し心も信の熱を燃起せずんば恐くは懶惰も由りて信仰全く吾人  
 の裡に消滅せん且恐らくはハリストス教はその諸機密と共に全く吾

人の爲に死したるが如くならん敵の謀る所は専ら吾人の心中にある  
信仰を消滅しハリストス教の眞理を全く忘れしめんとするの一事の  
み吾人が往々名のみハリステイアンとして其品行を願れば純然たる  
異教人たる人を見ることあるは之が爲めなり。

○吾人の信仰は吾人—牧師—の爲に施生力なく吾人は偽善的の神に  
奉事すと思ふ毋れ否吾人は眞先より何人よりも多く神の仁慈を蒙る  
ものにして實驗上主が其の諸機密を以て吾人と偕にし彼の至淨なる  
母と彼の諸聖人亦吾人と俱にするを知る例之は吾人は主の體血の施  
生の機密を領しつゝ其の實に生活を施すの力ある事と聖神に依る安  
和と喜悅の天賜を實驗すること屢なり又吾人は吾人の在天の主宰の

仁愛深き眷顧の吾人を樂ましめ彼の機密の吾人を樂ましむる樂さは  
至微不至なる國民の國王の優渥なる眷顧を蒙りて感激する歡びに優  
るを知る吾人若し神の愛する諸人より賜はる此の施生の機密の榮を認  
めず神聖の聖體禮儀を行ふ毎に吾人の心裡に行はるゝ彼の奇跡を頌  
揚せずんば主に對して忘恩頑迷の者たるを免かれざらん吾人は又尊  
貴にして生活を施す主の十字架の勝つべからず測るべからざる神聖  
の能力を實驗し其力より情慾憂鬱怯懦恐怖及其他魔鬼の狡計を  
心中より驅逐すること屢なり彼は實に吾人の友なり恩人なり吾輩の  
之を言ふや赤心を以て己の言の眞理なると勢力あるとを充分確認  
して言ふなり。

○汝は端倪すべからざることを憶測せんと欲す然れども汝は能く汝の靈魂を殺害する内心の憂悲が如何よして汝を襲ひ又如何よせば—主を措て他よ—之を驅逐する方法を發見し得るを知るか汝は先づ潛心憂悲を脱する方法と己の心を安穩ならしむる方法とを識得せよ而して後若し要あらば端倪すべからざることを論究せよ『最と小事すら能はざるよ何ぞ其他を思ひ煩ふや』路加十二の廿六

○汝の身体の構造に於て何者の智慧は現はるゝや何者か果して汝の存在と血液の循環とを維持するや汝が思想の法則を律定し万國民の思想をして今日に至るまで此法則に従はしむる者は誰ぞ万國民の心は良心の法を銘記し万國民をして此良心に循ひ善を賞し惡を罰せし

むる者は誰ぞ汝屢之を熟考せよ吁全能なる至智至善の神よ爾の手は恒に我罪人の上よ在り瞬間も未だ曾て爾の仁慈の我を棄てしことあるなし請ふ我をして常よ活信を以て爾の右手に接吻せしめよ吾何ぞ遠く往て爾の仁慈と爾の睿智と爾の全能の踪跡を尋ねべけんや嗚呼此踪跡は斯く現はよ我が身の上よ表顯す我—此の我—こそは神の仁慈睿智全能の奇跡なれ我は全世界を小形よ象せれるもの我が靈魂は見えざる世界の代表者我が身体は見ゆる世界の代表者なり。

○兄弟よ吾人の此世よ於ける生活の目的は何ぞ他なし吾人が此世の憂悲災難を實驗し機密に於て授けらるゝ恩寵の賜の佑助よ依りて漸徳に進歩したる後死後吾人の靈の安息たる神よ於て安息せんが爲

めなり。さればこそ吾人は死者の爲に歌ふて「主よ爾が僕の靈を安んせしめ給へ」といふなれ。吾人は總ての望の極として永眠者よ安息を得んことを望み神に之を祈るなり。されば吾人が死者の爲に太く悲むは豈淺慮ならずや。主曰く「凡そ勞苦する者及重を負ふ者は我に來れ我爾を息ません」と馬太十一の廿八夫の「ハリスティアニ」たるに耻ぢざる臨終よて永眠したる安息者は此の主の聲の下に來りて安息するなり。亦何をか悲まん。

○屬神的生活を爲さんと努むる人々よは瞬々刻々思想を経て最も精微にして又最も困難なる闘争あり。屬神的闘争是なり。故に造次顛沛も其目を鋭くし奸惡者(魔鬼)よりして靈魂に入り來る所の思想を精査

し以て之を斥けざるべからず。此の如き志を懐く人々は須く常燃るが如き信と謙遜と愛とを以て己の心に充たすべし。然らざれば忽ち魔鬼の奸計に陥り弱信若くは不信之に次て起り而して後諸惡亦續發し涙を以てするも容易に拭去るべからず。故に汝の心をして冷淡ならしむる毋れ就中祈禱の時よは力めて冷淡なる放心を避けよ。口よて祈禱を唱ふるも心には狡猾なる弱信若くは不信蟠まり人は口にて甚だ主よ近き如くなるも心よて之に遠ざかること往々之あり。祈禱の時よは奸惡者は吾人の心を冷淡にし狡猾ならしめんとして吾人の目よ觸れざる如く密々有らん限りの手段を用ゆ。祈れよ固めよ己の心を固めよ。○若し祈禱よて神より何等かの幸福を得んと欲せば祈禱よ先だちて

己の信仰を確乎一点の疑なきものと爲し適宜疑惑と不信とを防ぐの手段を執るべし若し祈禱の時よ於て汝の信心衰弱し信よ立つこと能はざるよ至らば甚悪し然るときは汝が狐疑しつゝ神よ願ふ所のものを得べしと思ふ勿れ何となれば汝は神を侮辱するものよして神は侮辱者よ己の恩賜を予へざるは勿論なればなり主曰く「凡そ祈禱に於て信を以て求むる所のものは盡く得べし」と(馬太廿一の廿二)即ち信を以てせず若くは疑を以て願ふ時はその得る能はざるや明なり主は又若し信ありて疑はずば山をも移し得べしと云へり(同上廿一)されば若し疑を懐き信せざるに於ては之を動す能はざるや論を待たす使徒イヤコフ曰く「(各人)疑ふことなく信じて求むべし疑ふ者は主より何物をも

受くると想ふ毋れ斯の如き人は武心よして其の行ふ所の事すべて定準なし」と(雅各一の六至八)神が果して人の求むる所のものを予ふるを得るや否を疑ふ者は其疑の爲よ罰せられ其心は疑惑の爲め痛く惱みて壓迫せらる全能の神を疑惑の影にてなりとも怒らしむる勿れ況んや汝は己の身よ神の全能力を實驗したること幾回なるを知らざるよ於てをや抑も疑惑は神よ對するの誹謗心の暴慢なる詐僞若くは我が心中に巢屈を作りたる詐僞の靈の真理の神よ對する詐僞なり汝須く毒蛇の如く之を懼れよ否余をして更よ直言せしめば之を蔑視せよ聊かたりども之よ意を注ぐ毋れ汝は神が汝の祈願する時よ於て暗く裡よ汝よ向て「我果して之を爲し得ると信するか」と提起するの問よ對し

て確答を得んと待受け給ふを忘るゝ毋れ然り汝須く心の奥より「主よ我信す」馬太九の廿八參看と確答すべし。然らば汝の信するが如く「成らん汝の心」疑惑若くは不信起らば左の如く思考せよ（第一）我が神に願ふ所は實在するものよして單に想像的のもの妄想又は空想的の幸福も非す而して凡そ實在するものは神より其存在を受けたるが故——何となれば「造られたるものよ」として彼よ由らで造られしは無き「約翰一の三」が故——凡そ有る所のものは一として彼に由らすして存在することなく天下の萬物苟も直接彼より存在を受けされば彼の旨若くは其許容よ由りて彼より造物に賦與せられたる能力若くは作用の媒介よ由りて存在し又は作らるゝものにして主は總ての存在するもの

よ對して全權を掌握する主宰なり加之ならず彼は「無きものをも有りしもの」如く「稱ふる」羅馬四の十七者なれば我若し有らざるものを願ふとも彼は之を造りて我よ予ふるを得べし（第二）我が願ふ所は出來得べきことなり吾人の爲し能はざる事も神よ取りて爲し能はざる所なし、されば此點より觀察しても障碍のあるへき理なし、何となれば神は我が理想に由りて出來得べからずとすることを我が爲し得べければなり、只淺慮の判断の我が信を妨ぐるこそ吾人の災難なれ、是れ己の斷定推論、分解の網にて真理を捕へんとする蜘蛛なり、信は直よ網羅し洞見し判断は迂路を経て真理よ到達す、信は靈の靈と感通する方法よして判断は靈身的の者の靈身的のもの、及單に物質的のものと



相通する方法なり、彼は靈神にして此は肉なり。

○靈魂の總ての幸福即ち凡そ靈魂の眞誠の生命安慰歡樂たるものは皆神よりす。是れ實驗なり。我が心は我に告げて云ふ聖なる靈よ爾は萬善の寶藏なりと。

○汝はハリストスを己の心よ懷きつゝ彼を逸し彼と共に心の安慰をも失はざらんことを懼れよ再び事を始むるは甚だ辛く一旦背離したる後再び彼よ体合せんと努むるは至難にして之が爲め血涙を流す者多からん有らん限りの力を竭してハリストスよ絶り付き之を得て彼の前よ對する神聖の勇氣を失ふ毋れ。

○汝等救世主の聖像を仰ぎ視ば彼が炯々たる眼光を以て汝を注視す

るを見ん此の注視は即ち彼が實際太陽よりも明かなるの目を以て汝を注視し汝の意思を悉く洞見し汝が心中の希望と嗟嘆とを聴くの象なり。彼は此像の圖と形とを以て畫くべからず形容すべからず只信を以てのみ悟了し得べき者を示すなり。汝等須く救世主が常よ汝等を注視して汝等衆人を汝等の思想憂悲嗟嘆と共に掌上に指すが如く洞見するを信せよ。主曰く「我れ掌に汝等を彫刻めり汝等の石垣は恒よ我が前よあり」と以賽亞四十九の十六此の全能照管者の語の中よ慰藉及生活の含むこと幾何ぞ。夫れ然り故に汝等救世主の聖像に對して恰も彼其者に對する如く祈禱せよ仁慈の主は己の恩寵よて聖像と偕よし其畫かれたるの目よて確かよ汝を見るなり。「主の目は何處も在りても壁

みる「箴言十五の三」されば彼は聖像に在りても亦其畫かれたるの耳にて汝等の祈禱を聴くなり只記憶せよ彼の目は神の目にして彼の耳が在らざる所なき神の耳なるを。

○良書傑作に於ては須く「此世に臨みて凡ての人を照すハリストスの光」【約翰一の九】を敬ひ凡そ熱心なる者よ豊かに己の光を注射する賜光者ハリストスに感謝しつゝ之を愛讀せよ。

○予は何處に在るを問はず憂悲する毎に常し我が心の目を擧げて神に向けさへすれば慈憐深き主は直に我が信と祈禱とに應答し給ひて憂悲忽ち經過す彼は凡ての時凡ての刻に於て我に邇し目を以ては視るべからざるも心よては明し彼を感觸せん憂悲は心の死にして神よ

背離するものなり神よ對して生々活潑なる信仰を懐く時心の快濶安穩を感ずるは是れ主が恒し我が側に在り我が衷に住み給ふことを確證するものなり吾人を罪惡若くは憂悲より救ふ者は果して如何なる仲保如何なる天使なるか惟一の神を措て他よこれあるなし是れ實験なり。

○請ふ試に吾人が祈禱の價値の程度を測るゝ人間の量即ち吾人の人に對する關繫の性質を以てせん吾人の人々よ對する關繫果して如何吾人は時ありて冷淡よ赤心よりせず職務上より或は儀式的に請願し稱讚し感謝し又は彼等の爲に働くことあり又時ありて熱心に赤誠を以て愛を以て之を行ふことあり或は時ありて偽善的の之を行ひ時

ありて誠實<sup>せいじつ</sup>之<sup>これ</sup>を行<sup>おこな</sup>ふことあり吾人<sup>ごじん</sup>の神<sup>かみ</sup>と對<sup>たい</sup>する關係<sup>くわんけい</sup>も亦猶<sup>またなほ</sup>此<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>く終始<sup>しゅうし</sup>一貫<sup>いつくわん</sup>せず然<sup>しか</sup>れども決<sup>けつ</sup>して爾<sup>なん</sup>か爲<sup>な</sup>すべからず乃<sup>すなは</sup>ち神<sup>かみ</sup>を讚美<sup>さんび</sup>し感謝<sup>かんしゃ</sup>し之<sup>これ</sup>を祈願<sup>きぐわん</sup>するも當<sup>あた</sup>りて常<sup>つね</sup>も赤心<sup>せきしん</sup>を以<sup>もつ</sup>てし常<sup>つね</sup>も誠心<sup>せいしん</sup>彼の前<sup>まへ</sup>に在<sup>あ</sup>りて事<sup>こと</sup>を行<sup>おこな</sup>ひ常<sup>つね</sup>も誠意<sup>せいい</sup>彼<sup>かれ</sup>を愛<sup>あい</sup>し彼<sup>かれ</sup>を恃<sup>たの</sup>まざるべからず。

○神<sup>かみ</sup>の存在<sup>そんざい</sup>を信<sup>しん</sup>ずるの信<sup>しん</sup>は靈界<sup>れいがい</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>分<sup>ぶん</sup>たる自己<sup>おのれ</sup>の靈魂<sup>れいこん</sup>の存在<sup>そんざい</sup>を信<sup>しん</sup>ずるの信<sup>しん</sup>と密接<sup>みつせつ</sup>し關係<sup>くわんけい</sup>す敬虔<sup>けいけん</sup>なる靈魂<sup>れいこん</sup>が神<sup>かみ</sup>の存在<sup>そんざい</sup>を信<sup>しん</sup>ずるの明確<sup>めいけつ</sup>なること恰<sup>あた</sup>りも自己<sup>おのれ</sup>の存在<sup>そんざい</sup>を信<sup>しん</sup>ずる如<sup>ごと</sup>し何<sup>なん</sup>となれば意思<sup>いし</sup>希望<sup>きぼう</sup>志念<sup>しねん</sup>又<sup>また</sup>は言<sup>ことば</sup>或<sup>あるひ</sup>は行<sup>おこな</sup>ふ善<sup>ぜん</sup>若<sup>も</sup>くは不善<sup>ふぜん</sup>なるも應<sup>おう</sup>じ心中<sup>こころのうち</sup>に必<sup>かなら</sup>ず之<sup>これ</sup>も相當<sup>きうたう</sup>する變化<sup>へんわ</sup>起<sup>おこ</sup>りて或<sup>あるひ</sup>は心<sup>こころ</sup>の安<sup>やす</sup>きを覺<sup>おぼ</sup>え或<sup>あるひ</sup>は不安<sup>ふあん</sup>心<sup>しん</sup>を感<sup>かん</sup>じ或<sup>あるひ</sup>は歡喜<sup>くわんき</sup>と爲<sup>な</sup>り或<sup>あるひ</sup>は憂悲<sup>いうひ</sup>と爲<sup>な</sup>るなり是<sup>こゝ</sup>れ即<sup>すなは</sup>ち諸靈<sup>しよれい</sup>諸體<sup>しよたい</sup>の神<sup>かみ</sup>の人の靈魂<sup>れいこん</sup>と反射<sup>はんしゃ</sup>するものとして夫<sup>か</sup>の

神<sup>かみ</sup>が敬虔<sup>けいけん</sup>なる靈魂<sup>れいこん</sup>と反射<sup>はんしゃ</sup>すること恰<sup>あた</sup>りも太陽<sup>たいやう</sup>の水<sup>みづ</sup>の滴<sup>したたり</sup>と反映<sup>はんえい</sup>するが如<sup>ごと</sup>く此<sup>こゝ</sup>の滴<sup>したたり</sup>として清<sup>きよ</sup>ければ清<sup>きよ</sup>きはと其<sup>そ</sup>の反映<sup>はんえい</sup>も亦<sup>また</sup>甚<sup>おそろ</sup>だ明<sup>あき</sup>かなるも其<sup>そ</sup>の濁<sup>にご</sup>るときは濁<sup>にご</sup>れるはと反映<sup>はんえい</sup>も亦<sup>また</sup>朦朧<sup>もうろう</sup>として靈魂<sup>れいこん</sup>の不潔<sup>ふけつ</sup>不淨<sup>ふじやう</sup>其<sup>そ</sup>の極<sup>きよく</sup>に達<sup>たつ</sup>するも於<sup>お</sup>ては反射<sup>はんしゃ</sup>杜絶<sup>とつたつ</sup>して靈魂<sup>れいこん</sup>は暗黒<sup>あんこく</sup>無感<sup>むかん</sup>覺<sup>かく</sup>の情態<sup>じやうたい</sup>に陥<sup>おち</sup>り人は目<sup>め</sup>を有<sup>あ</sup>すれども物<sup>もの</sup>を視<sup>み</sup>ず耳<sup>みみ</sup>を有<sup>あ</sup>すれども聞<sup>き</sup>かざるも至<sup>いた</sup>るなり又<sup>また</sup>更<sup>さら</sup>も主神<sup>しゆかみ</sup>の吾人<sup>ごじん</sup>の靈魂<sup>れいこん</sup>と對<sup>たい</sup>する關係<sup>くわんけい</sup>を譬<sup>たと</sup>ふれば外部<sup>ぐわいぶ</sup>の空氣<sup>くうき</sup>の寒暖<sup>かんぬん</sup>計<sup>けい</sup>内の水銀<sup>すいぎん</sup>と對<sup>たい</sup>する如<sup>ごと</sup>し只<sup>ただ</sup>其<sup>そ</sup>の相異<sup>あひこと</sup>なる所<sup>ところ</sup>は水銀<sup>すいぎん</sup>の膨脹<sup>ぼうちやう</sup>停滯<sup>ていしやう</sup>昇降<sup>しやうかう</sup>は大氣<sup>たいき</sup>の變動<sup>へんどう</sup>と原因<sup>げんいん</sup>すと雖<sup>いへ</sup>も神<sup>かみ</sup>は不變<sup>ふへん</sup>永遠<sup>えいゑん</sup>にして永<sup>なが</sup>く至<sup>いた</sup>仁<sup>じん</sup>公義<sup>こうぎ</sup>なるも在<sup>あ</sup>り靈魂<sup>れいこん</sup>の神<sup>かみ</sup>と對<sup>たい</sup>する關係<sup>くわんけい</sup>は變動<sup>へんどう</sup>するを免<sup>まぬ</sup>れずして信仰<sup>しんかう</sup>と善行<sup>ぜんかう</sup>にて神<sup>かみ</sup>と近接<sup>きんせつ</sup>する時は其<sup>その</sup>心<sup>こころ</sup>必<sup>かなら</sup>ず快濶<sup>くわいらく</sup>安穩<sup>あんゑん</sup>なるべく弱信<sup>じやくしん</sup>にて神<sup>かみ</sup>と遠<sup>とほ</sup>ざかり神<sup>かみ</sup>の眞理<sup>しんり</sup>を

信せず法は背くの行を爲す時は必ず壓迫し不安として煩悶すべし  
 ○奸悪者は吾人の祈禱を恰も沙塵の如く撒亂せんとし言をば乾燥し  
 たる沙の如く連続なく濕氣なき者と爲し以て心の温暖なからしめん  
 とす祈禱は時ありて沙の上は建てたる家と爲り時ありて磐の上に建  
 てたる家と爲るなり(馬太七ノ廿四、廿六)信仰なく放心冷淡にして祈  
 輩は沙上は家を建てる者にして此の如き祈禱は自ら散亂して祈禱する  
 者より利する所なし只祈禱の間主に其目を注ぎ之より祈ること恰も生者  
 より對する如く面々相對して談話するが如くする者は磐の上は家を建  
 つる者なり。

○恩寵の言諸聖父の書祈禱文獻中聖三者たる神言の言は眞は活水な

り水は流るゝものなり言も亦水の如くは流る水は身体を快活爽快よ  
 す恩寵の言も亦靈魂を蘇して平和と歡喜とを以て之より盈て或は感動  
 痛悔の念を以て之を貫徹す。

○吾人が祈禱する時其の求むる所のものを得んどの希望は神の仁慈  
 と慈憐を信ずるの信より基づく(神は至仁鴻慈にして人を愛するの神な  
 るが故)且之より就て吾人は彼が他人(聖書及び諸聖人の傳記)を見ゆる如  
 く並に吾人より對して仁慈及び慈憐を垂れたる無數の先例を記憶す故  
 ゝ祈禱をして其効あらしめんが爲めは祈禱する者既より其の求むる  
 所のものを得たるが如くして心中之を確信すること必要なり吾人は  
 屢祈禱より由りて己の求むる所のものを得ることあり就中吾人の靈魂

の救贖に關して求むる所のものを得ること屢之あり然るときは吾人は直之を神の賜とし神の恩寵に依るものとし決して之を偶然の出來事と歸すべからず全能なる神の國に於て何くも偶然を容るゝの餘地あるか何物たりとも其實彼に由らずして存在するものゝ非ず造られたる者一として彼に由らで造られしは無ければなり」(約翰一の三)多くの人の祈禱せざるは自ら祈禱して神より何の賜をも受けざりしと思惟するに依るか或は祈禱を以て不必要の事と見做すに依るなり彼等は神は吾人の求むるに先だちて總ての事を洞見すと公言し「求めよさらば爾等に予へられん尋ねよさらば遇はん門を叩けよさらば爾等に啓かれん」(馬太七の七)と云はれしを忘るゝなり吾人の求め(祈禱)は吾

人の救贖を得る惟一の方法たる信仰力を強うするが爲に必要なり「蓋し恩寵に由り信仰して救を得」(以弗斯二の八)「ア、婦よ爾の信は大なり」(馬太十五の廿八)夫の救主が婦をして切々願はしめたる所以の實に之をして信仰を起し之を強うせしめんが爲めなり此の如き輩は自ら生命と等しく必要にして「ハリステイア」の最も尊ぶべき資たる信仰を有せず不信を以て神を讒者とし(約翰第一書一の十)自ら魔鬼の子にして神の矜恤を受くるに堪へざる者滅亡の徒たるを知らざるなり又祈禱の時には属神的の幸福を希望するの念と神を愛するの念を以て其心を熱し彼が人類に對するの慈憐極めて深く父たるの愛情を以て人間の總ての祈禱を聴納れんとするの意あるを確信すること必要

なり「爾等惡しと雖も尙善賜を以て己の子よ予ふるを知る況て爾等の天の父は己よ求むる者よ善物を賜はざらんや」馬太七の十二

○神は永遠の眞理なるを以て一瞬間たりとも吾人の眞理よ疑を容るを許し給はず神は永遠の仁慈なるを以て万民の救を得て眞理を知るよ至らんことを欲す提摩太前二の四されば吾人も仁慈なる神の子として万民よ對し——縱令己の敵たる者よ對しても誠心その救を得んことを望み且之を慮らざるべからず。

○汝は畢生間常よ須く猛省して己の心を鑒み其至福なる神と体合するよ妨くる者は果して何者なるかを其心に問へ是れ學問中の學問にして汝は神の寵佑よ由り汝を神より遠ざくる者は何者なるか汝をし

て神よ接近せしめ彼と體合せしむる者は何者なるかを看破すること易々たらん汝の心自ら何者か汝をして神と體合せしめ何者か汝をして神に背離せしむるかを汝よ告げん吾人の心と神との間に立つ者は重よ夫の奸惡者よして彼は種々の慾情肉体の慾目の慾世の驕傲の慾を以て吾人を神と隔離せしむるなり。

○見ゆると見えざる萬物の造者たる神言が自ら麵包と葡萄酒とを化し其本質を變じて己の至潔の體至淨の血と爲すも何ぞ怪むよ足らん此の麵包と葡萄酒よ於て神の子は新たよ籍身するものよ非ず——何となれば彼は既よ一たび籍身し而して此籍身は窮りなき永世の爲よ十分なればなり——乃ちその會て籍身したる體よて籍身するものよして

其狀恰も彼が五箇の麵包を増加しその五箇の麵包を以て數千人の飽かしめたる如し天地間も機密秘事の多き勝て數ふべからず而して我が智は物体に就てすら之を臆測端倪すること能はざるも物体は依然その機密と共に存在す是の如く此の施生的体血の機密に於ても麵包と葡萄酒が如何にして主の体血と爲るやは吾人を取りて機密なりと雖も主の体血の機密は吾人より了解せられざる儘にて實際存在するなり我が造者は睿智無終全能の神として機密多し我亦彼の手の工として自ら己の爲め機密たり主の神は我が靈の爲めの機密にして彼れの体血は我が靈身の爲めの機密なり。

○靈魂が己の身を擔ふ如く神は全世界を包括せられずして之を擔ふ

靈魂は其身体に充滿し主の神は全世界を充盈す『ソロモン智慧書一の七』唯靈魂は到る處に擔はるゝを得るが故縱令全然ならざるもせよ身体に制限せらるゝも主の神は此世界に制限せられず靈魂の身体に於ける如く世界の中に包括せられず。

○信仰よて吾人の心は移し入れられたるのハリストスは安和と喜悅とを以て之に安坐し給ふ神を指して『彼は聖として聖人より宿り給ふ』徹夜禱の高唱と云ふは誠は偶然に非ず。

○汝は須く人の容貌の美に目を注かずして乃ち其靈魂を看よ汝は人の衣服(身体は一時の服なり)に目を注かずして之を着たる其人を看よ汝は家屋の壯麗を目を注すして之に住む者の何人にして其の人と爲

り如何を看よ然らば汝は人の裡に在る神の像を辱しめ王には毫も之に對して表すべき尊敬を表せず其臣下も敬拜して王を侮辱するに至らん汝は又書籍の活字の美よ目を注かずして其書の精神を見よ然らずば精神を蔑視して身体を崇敬する事とならん何となれば文字は則ち身体よして書中の意義は其精神なればなり汝は樂器若くは活聲の朗々たる音調に心酔せずして須く其音調の靈魂よ及ぼす感情に由り若くは言に由りて其精神如何を探究せよ而して若し其音調は汝の靈魂をして靜穩潔白神聖なる感情を起さしめば之よ耳を傾け之れにて汝の靈魂を養ふべし若し其音調よ依りて汝の靈魂よ情慾を吹込むが如きことあらば宜く之を聞くと止めて音樂の体と精神とを共棄

てよ。

○内の人(心)は早朝醒め起きたるときよは俗塵よ染まず己の肉体の闇黒よ拘束せられず奸惡者の誘惑よ束縛せられずして恰も夫の時として水面よ躍り出る魚の如く物を識別すること最も敏なり自餘の時間は概ね透徹すべからざるの闇黒よて蔽はれ有形無形の事物の道理を掩蔽する帛紗にて其目を遮らる汝須く朝の時間を捕捉せよ是れ恰も此生活の一時の夢よて革新せられたる新時間の如きものなり此時間は一は以て吾人が復活の暮れざる日の朝に更新せられたる者として復活せし時又は此の死の体より蟬脱したる時の情態を示すなり。

○人は祈禱の時よ於ても概ね自由の子に非ずして事情と義務の奴隸



たるなり試よ何人をか——縦し司祭よても可なり——之を諦視せよ自由  
快潤なる心活信熱愛を以て祈る者豈多からんや。

○祈禱する時時として心中幽暗懊惱として殆ど死にもすべき心地す  
ることあり是れ心の不信より起るなり(不信は即ち暗黒なり)此時よ於  
て落膽する勿れ乃ち神聖の光は汝よ絶えたりとするも其光は神よ於  
て在天在地の神の教會よ於て神の永能と神性との現はるゝ羅馬一の  
廿物質世界よ於て常よ煌々隆々として輝くことを記憶せよ真理は衰  
弱したりと思ふ勿れ真理は決して衰弱するものよ非ず何となれば眞  
理は乃ち神そのものよして凡そ存在する所のものは皆彼よ其基礎と  
原因とを有すればなり真理よ於て衰弱するものは常よ必ずしも真理

の光の反射力を忍び受くる能はず常よ必ずしも真理の潔白を容るゝ  
こと能はざる汝の微弱有罪暗黒なる心是のみ蓋し心の之を容るゝは  
只その潔白なる時若くは心靈的暗黒の首因たる罪より清められたる  
時に限るなり——之が證は汝自身より取るを最も近道とす信仰若くば  
神の真理の光汝の心よ存するときは汝の心は安穩毅然泰然爽快なる  
も其光絶ゆるときは不安心よして生氣なくその弱きこと猶風よ搖蕩  
せらるゝ蘆の如し。されば汝此の撒但の暗黒よ意を傾くる毋れ宜しく  
施生的十字架の徴を畫して之を心より逐ふべし。

○縦令汝の終日労働よ醒醒したる時と雖も赤誠の祈禱を献ぐるが爲  
よ己を惜む勿れ神聖なる祈禱を献ぐる時よ於ては聊も不注意なる毋

れ乃ち總ての事を赤心より主よ告げよ祈禱は是れ神の業なり一旦着手したる事は之を辞する毋れ「手を犁に着けて後を顧みる勿れ」路加九の六十參看不注意なる且つ赤心より出でざるの祈禱を爲したらんは己の罪を神の前に泣き盡すよ至るまで寝る毋し若し夜間の祈禱ならばされど人皆之を能くせず修練したる者のみ之を能くす汝は慎みで己の肉体を神より重んずる毋れ乃ち神の爲よは肉体の安樂をも犠牲とすべし汝が行はんとしたる祈禱の式は快く之を遂行し則ち長き祈禱の式なれば其式を悉く行ふべく短きも亦同じ心の一半は神に屬し他の一半は己の肉体に屬するが如く貳心を懷きて神の事業を行ふ勿れ主神の嫉妬は汝の奸譎汝の自愛心を容忍せざるなり彼は汝を魔

鬼に交付し而して魔鬼は汝が汝の心の眞誠の安樂たる者汝の心をし  
て神に接近せしめんとて常よ汝の利益の爲よ之を行ふ者(即ち神を蔑  
視したるに由り汝の心をして片時も安樂を得せしめず何となれば誠  
心よ出でざるの祈禱は心を神より遠ざけ之をして反て人よ敵對せし  
むるよ至るも誠心よ出づるの祈禱は人の心を神に近づけ之を神に親  
しきものと爲すなり故よ汝は宜く速よ休息し以て身体の安樂を得ん  
が爲め急ぎて祈禱せよ然らざれば身体の安樂と靈魂の安樂とを失は  
んどの言を信せよ嗚呼吾人は吾人の心を神に接近せしむるよ言ふべ  
からざるの勞と汗と涙とを以てせざるを得ず吾人豈復た己の祈禱(不  
注意)そのものを以て神に遠ざかるの具と爲すべけんや神亦豈憤ら

ざらんや。憶ふに彼は吾人をも吾人の以前の勢をも惜むなり故に彼は吾人をして必ず誠心復た彼に向はしめんと欲す。然り彼は吾人の常に彼に属せんことを欲するなり。

○神なくんば(神若し在らざる所なき者)非ずんば(我が意思と心の一動作もある能はず)茲に作用われれば必ず原因あり茲に結果あれば必ず其初なくんば(あらず)故に使徒曰く「我儕己よりて自ら何事をも思ひ得る能はず我儕の思ひ得るは神に因れり」と(哥林多後三の五)神は活く我が靈魂の活くるも亦實に之が爲めなり。

○若し我が生命にして數分間——例へば拾分間——繼續したりとし而して其内五分は安穩の時にして自餘の五分は憂鬱辛苦の時なりとせん

然る時は我必ず確信して曰はん然り我にも生命を賜ふ者あり我も生命を賜ふ者は我のことを慮ると而して又必ず此世に死の權を掌握する者ありと明言せざるべからず何となれば同一の原因は互に齟齬する作用を生ずること能はざるものなるが故夫の不快の五分間は必ず神に反對する者より來らざるを得ざればなり。予罪人に至りては我が靈魂の生活上に於て百分の内少くとも七十は神に属し惡魔に属するもの僅に三十のみ争でか夫の鴻仁者を常に己の前に見心竊に彼に對する活信を動かすべけんや。

○時は流れて已ます我が身体も生存中常に變化變遷し全世界もその運行に由りて見ゆる如く新陳代謝して恰も装置されたる機關の如く

その豫定せられたる終局は近づくかんとするもの、如し然らば不變不動のもの果して何處に在るか。此森羅萬象を運轉して其目的に向はしむる者は是れ不變不動のものなり。此の複雑なる被造物の本原其者は是れ不變不動なり。彼は複雑ならず故に新陳代謝せずして永遠なり。此本原の像は肖せて造られたる天使と人間の靈魂も亦不變不動なり。自餘のものは皆是れ水泡のみ。予は此語を以て敢て造物を蔑視するに非ず。造物主及幸福なる諸靈に比して之を言ふのみ。

○神聖の機密を確信し領聖に於て顯はるゝ活神の子イエススハリス  
トスの至大の奇蹟を重んぜよ。奇蹟とは何ぞ。他なし罪にて戕害せられたる汝の心の安穩と快活にして領聖前汝の心裡は蟠まりし煩悶と心

靈的の死の後汝は明々地に之を感ずべし。習慣より由りて汝は此機密を尋常の事緊要ならざるものと見做す勿れ。斯かる思想を懐かば汝は神の怒を招きて領聖の後安和と生命とを感得すること能はざらん。汝は須く生活を施す賜の爲め中心より深く感謝して主より生命を求めべし。然らば汝の信は益々成長せん。恐怖と煩悶は不信より起るなり。領聖の時此念の起ることあらば之を以て汝が夫の聖爵の中に臨在するの生命より不信にて遠ざかりたる確かなる徴と思ひ決して之を意を傾くる毋れ。ア、信なる哉。信なる哉。汝信自らは吾人の爲に奇蹟なり。吾人を救ふ者は汝なり。曰く汝の信は汝を救へりと。馬可五の三十四。吾人堅く神の眞理を信せば常々心安らかよして主の前を退き薄信なると

きは之より反して常より安心を得ずして去るべし。嗚呼彼れ撒但は動もすれば吾人が宜きより適はずして聖機密を領したる後吾人の心より潜み入り吾人の心中より詐偽即ち不信を入れんとす何となれば不信は詐偽に等しければなり古より兇殺者たる彼は今又己の詐偽と種々の思想を以て人を殺さんとし百方手段を運らし不信或は其他の慾の姿にて吾人の心中に忍び入るなり而して彼れ己に汝の裡より潜めりと見れば汝は之と別れんとするも速より別るゝ能はざるべし何となれば彼は常より不信と頑迷と其他己れより出る悪念を以て其心より脱出せんとする總ての途を壅塞すればなり墮落せしアルヒストラテイクよ汝は我を惱まさんとするもその甲斐なし我は我主イエススハリストスの僕なり汝

位高き傲慢者は我れ弱者と斯く極力相闘ふは汝自ら己を卑うするものなり……汝の心裡より重負と爲りて蟠まり汝を種々の悪より強迫するの悪鬼より向て汝は心窃より斯く言ふべし此言は彼れ傲慢者より取りて恰も火の筈の如く彼は汝の剛毅と聰明とを辱められて汝より去らん汝は直に之を見之を感じ汝の心より奇々妙々なる變化の起れるを驚かんと即ち汝の靈魂の忍ぶべからざりし重荷は已より汝の心より在らずして輕々快々となり汝は現より天の下より悪鬼なる者ありて常より吾人の滅亡を謀り闇昧嫉悪なる思念の毒にて吾人の心を毒害し人々より對するの愛情とその友誼とを破らんとするを感じすべし。

○我が總ての災は我が目より見えざる意思と見えざるの心より於て起る

なり故に吾人の心を洞見する見えざるの救世主も亦我に必要なり。ア、我が固めなる神の子イエスよ。ア、我が智慧の光我が心の平和喜悦よ光榮は汝に歸す。我が智と心と闘ひ我が生命の本原我が危所に於て我を殺すの見えざる敵より我を救脱したる汝に光榮を歸す。

○驕傲の萌芽には深く注意せよ、彼れの發芽するや不知不識の裡にありて就中最も取るよ足らざる微々たる事件の爲め徒らよ憂憤する時よ起るなり。

○惡の毒よて惱まざるよ吾人の靈魂よ對する生活を施す十字架の奇妙々の効用は吾人をして(一)吾人よ靈物たる靈魂あり(二)吾人の靈魂を戕害する惡鬼あり(三)吾人の神及主たるイエスハリストスありそ

の神性よ由りて常よ吾人と偕よし(四)彼は確かよ十字架の上よ於てその十字架の苦難と死よて吾人の救贖を成就し十字架よて惡魔の國を打破したりとのことを疑ひなく確信せしむ。一箇の生活を施す十字架の吾人よ及ぼす奇妙々の効用よりして吾人の信仰の益となる證詰の擧がること幾何ぞ光榮はハリストス教よ歸す。

○心靈的の生活を爲す者は心の目よて魔鬼が如何に奸計を運らし天使が如何に指導し、主が如何に其主權を以て人の誘惑よ罹るを看過し如何に之を慰むるかを見るなり。

○終日全く神聖よ安和よ無罪よ消光せんとせば醒起きたる後赤誠熱心の祈禱を捧ぐるは是れその惟一の方法なり。此くの如き祈禱は心に

ハリストスを父及び聖神と共に入れ悪の蔓延を防ぐの勢力を靈魂よ  
予ふるなり。

○汝は靈魂の愛々鬱々たる時時として死なんと欲することあり死は  
易く多くの時を要せずされど汝は果して死の準備したるか想ふに死  
後よは汝が生存中の審判行はる(希伯來九の廿七)汝未だ死よ準備せず  
して彼若し汝を襲はば汝は全身戰慄せん汝は空言を費す勿れ汝は我  
寧ろ死するを優れりと言ふ勿れ乃ち宜く我は如何よしてハリ  
スライニン風よ—信を以て善行を以て我よ遭遇する災難憂悲を毅然と  
して凌ぐを以て—死の準備を爲し死を以て萬有の恐るべき法と見做  
さす乃ち在天の聖且福なる不死の父の永遠の國よ呼ぶ慈父の聲とし

て恐るゝことなく耻ることなく安然として死を迎ふべきかと屢々言  
ふべし曾て一老人あり重荷を負ふて勞働し生さんよりは寧ろ死なん  
と欲せしよ死の來るや死するを欲せずして寧ろ己の重荷を負はんと  
欲したりとなん汝能く之を味ふべし。

○予は心の靈目にて予が如何よして冥々裡よ我心よハリストスを吸  
收しハリストスが如何にして我心の中よ入り俄よ之を慰め之を樂まし  
むるかを見る然り々々予は爾生命を施す者我が呼吸我が喜悅と共に  
せずして獨り居らざらん汝と共にせざれば我よ禍なり。

○急遽に祈禱するも敢て祈禱を害することなきか清き心を以て内心  
の祈禱よ慣れたる者には可なり祈禱するよ當りては心にて眞實その

願ふ所のものを得んと希望しその口に言ふ所の真理なるを感ずること  
 必要なり而して清き心は恰も其天性之を具ふるもの如し故に  
 清き心は急遽に祈禱するを得べく而もその急遽は祈禱の眞理(眞實)を  
 害せざる故神に悦ばるゝなり然れども心中の祈禱に慣れざる者は急  
 遽に祈禱せずして心中に祈禱の言毎之が相當の反響の響くを待つ  
 べし祈禱の觀察に慣れざる者は常に必ずしも速に之が反響を受けざ  
 るなり故に此の如き人は祈禱の言を徐々唱ふるを以て飲くべから  
 ざる法規と爲さるべからず須らく一言を發する毎に心之に相當  
 する反響の響くを待て。

①人の心は或は神に接近することあり或は神に遠ざかることあり而

して之と共に或は安慰あり喜悅あり或は擾亂あり恐怖あり鬱屈あり  
 或は心靈的の生あり死あるなり神に接近するは多くは憂悲の時或在  
 るものにして即ち主の外何人も吾人を救ふこと能はざる時は、全心  
 を傾けて主に向ひ眞實主に近づくなり又神に遠ざかるは此世の幸福  
 の豊かなる時或在るものにして、此幸福は情慾に溺るゝ舊人をして慢  
 心を起さしむ人は富と榮と名聞とを渴望し而して其志を達するや忽  
 ち心中の信仰を失ひ審判者及び報酬者たる神あることを忘れ己の靈  
 魂の不死の理を忘れ全心を盡して神を愛し又人を愛すること己を愛  
 するが如くすべき人間の義務を忘るゝに至るなり。

○惡き人が善良温厚謙遜なる人願ふ所ありて之に求むる時は其



願の速に聴納れられんが爲め自ら努めて其人に倣はんとする如く、ハ  
 リステアニンも亦主或は彼れの至淨なる母或は天使或は聖人に祈禱  
 するに當りては己れの祈禱の聴納れられんが爲め、可能的主に若くは  
 彼れの至淨なる母若くは天使又は聖人に則らざるべからず、吾人の神  
 に近づき其祈禱の速に聴納れらるゝ秘密は則ち此に在るなり。  
 ○三位に於て輝くの神は我を見我に聴くとは是れ最も有効なる信仰  
 にして安和と喜悅とを以て我心に充たすものなり、神言の慈愛深き母  
 も亦我を見彼に捧ぐる我が祈禱と嘆息とを聴くとは是れ又一の心を  
 慰むる信仰にして常に實地に之が應驗を見る予は神の在らざるなく  
 知らざるなき感情を懷きて歩まん。

○人々が造物照管及び救贖に對する神の仁慈を感せず或は之を感ず  
 ること甚だ微々たるは縦令或人は之を感覺せんと努むるも拘はら  
 ず是れ此世に魔鬼の存在する争ふべからざる證なり何となれば此事  
 たる總て善なるもの義なるもの強く反抗する者あるを證明するも  
 のなればなり。  
 ⊕吾人の生活の首眼は神と体合するに在り然るに罪は全然之を妨害  
 す故に罪をば恐るべき敵靈魂の兇殺者として之を避けよ何となれば  
 神と偕にせざるの靈魂は死して生命にあらざればなり吾人は宜く  
 己の天職を辨へ万民の主宰が吾人を招きて己れと体合せしめんとす  
 どのことを斷えず心に銘記すべし。

○「ハリステイアニン」たる者は心の目よて神を見、彼が如何よ吾人よ愛を垂れ、如何よその諸の美德を以て吾人よ臨み給ふかを見、天使の美を見、女幸の榮を見、彼の靈魂の美と彼の神の母たる威徳を見、神の諸聖人の靈魂の美と彼等の吾人よ對する愛を見、彼等の人と爲り如何を見、ハリステイアンの眞理を其の諸機密と共よ見てその威嚴を感得し、己の靈魂の情態就中己の罪を見ざるべからざるよ依り殊よ其心を清淨よせざるべからず、心清からずして俗事よ戀々とし、肉体の慾と目及び此世の驕傲の慾とよ溺るゝ者は吾人の列擧したる所のもの一として之を見ざる能はざるなり。

① 祈禱は神よ智と心とを捧ぐるものなり(正教訓蒙の語)されば凡そ智

と心とを肉体上の事例へば、金銀名譽等よ緊束さるゝ人又は心よ怨恨嫉妬等の慾を懷く者は祈禱すること能はざるや論を俟たず、何となれば慾は常に心を束縛し、神をして之を開き、之に眞誠の自由を予ふること能はざらしむるものなればなり。

○ハリステイアスが如何よして自ら十字架の記號と合し、之に慾と魔鬼とを逐ひ擾亂したる靈魂を鎮むるの奇能を賦するかは端倪すべからず、之と同じく吾主イエススハリステイアの神が如何よして麵包と葡萄酒と合し、之を化して体血と爲し、吾人の靈魂を罪より清め、之よ天の和平と安慰を注入して、善良溫柔謙遜なるものと爲し、誠實の信と望とを盈つるものと爲すかも亦臆測すべからず、吾主イエススハリステイアの至

能造化的の神の在らざる所なく彼が到る處に於て無きものをさへ有りしものゝ如く稱ふる(羅馬四の十七)を得る所以を思はゞ以て其一斑を知るゝ足るべし。夫の薄信の徒をしてハリストスの十字架若くは名其者が自から奇跡を行ふものにしてハリストスの行ふものゝ非ずと思はざらしめんが爲め吾人は心の目若くは信仰よて主ハリストスを見ず彼が吾人の救贖の爲め行ひたる所のことを誠心信するに非ざればハリストスの十字架と其名は斷じて奇跡を行はず。

○我は世の末に至るまで常に爾曹と偕にせん(馬太廿八の二十)然り主幸よ爾は日々常々吾人と偕よし吾人は一日たりとも爾と偕よせず爾と與ふ居らずして生活することなし就中爾は己の体血の機密は於て

吾人と偕よし。ア、爾が機密の中に臨在すること如何に眞實なるよ。主幸よ爾は聖體禮儀の行はるゝ毎に罪を除くの外吾人は似たるの体を衣己の生活を施す肉体よて吾人を養ふ爾は機密に由りて全く吾人と偕よし。爾の肉体は吾人の肉体と合し。爾の神は吾人の靈と合し。而して吾人は此の生活を施す極めて安和にして極めて快絶なる体合を感覺し。聖體禮儀は於て爾に体合しつゝ主に合する者は主と一靈と爲る(哥林多前六の十七)と云はれたる如く爾と一靈と爲りたるを感ず。爾が己を指して我は柔和にして謙遜なり(馬太十一の廿九)と云へりし如く吾人も爾に似て善良柔和謙遜と爲るなり。夫の狡猾盲目の体若くは吾人の有罪なる肉体に居る斯世の君は動もすれば吾人に曝きて機密には

單に麵包と葡萄酒のみよして主の体血あるに非すと云ひ、視官味官觸官を以て之が狡獪なる證者と爲す然れども吾人は我心をして敢て彼の讒言を傾聴せしめずして左の如く思考す、主よ爾は能はざる所なし、爾は人と獸と魚と蟲と凡ての造物よ肉体を賜へり爾在らざる所なく、満たざる所なき者は豈己の爲め肉体を造ること能はざらんや、他人の爲め彫刻物を作るの彫刻師は豈己の爲め之を作る能はざるの理あらんや、加之爾は生氣なきものを化して有生物と爲す例へばモイセイの杖を化して蛇と爲し、如き一として爾の爲し能はざる所の者なし、爾豈獨り夫の飲食よ使用せられて吾人の血肉と化し去り吾人の肉体よ親近なる麵包と葡萄酒とを以て己の爲め肉体を造る能はざらんや

爾は吾人の信仰をしてその耐忍ぶこと能はざるほどの試惑よ遇はしめず、哥林多前十の十三、爾は土塊を化して己の至淨の体血とせず、乃ち白く柔く清くして味善き麵包を化して体血と爲し水を化して己の血と爲さず、乃ち夫の血の色よ似て聖書よ房様の血と稱せられ、シラフ三十九の三十二、味善くして人の心を樂ましむるの葡萄酒を化して血と爲す、爾は吾人の荏弱と吾人の信の篤からざることを知り、己の体血の機密の爲よ最も吾人に縁近き物を使用し給へり、吾人は確然信ずべし、麵包と葡萄酒の形よて吾人は主の眞体眞血を領食し、主は領聖の機密よ於て常よ世の末まで吾人と偕よせんとするを。

○吾人の靈魂は云は、神の面の反射よして此反射の明且つ大なる丈

け靈魂も光りて安穩よ其反射の微少なる丈け闇味よして不安心なり  
 而して吾人の靈魂は即ち吾人の心なる故感情よ由り感謝よ由りて之  
 よ神の諸の真理の反射して毫も闇黒の反射の無からんことを努めざ  
 るべからず汝は須らく至淨の機密よ於て神の愛を感銘し諸の祈禱の  
 眞實なるを感覺せよ吾人の心は鏡なり外界の事物が通常の鏡よ寫る  
 が如く眞理をして正確よ我が心よ反映せしめざるべからず。  
 ◎有徳の人と爲るは善し甚だ善し善人は自らも心安穩よして神よ悦  
 ばれ人よも愛せらるゝなり有徳の人は不知不識衆人をして己よ目を  
 注がしむ是れ何の爲ぞ他なし其馥郁たる芳香が端なく人目を惹き之  
 を嗅しむるが故なり試よ有徳の人の容貌を看其面を瞥見せよ其面果

して如何宛然是れ天使の面なり柔和と謙遜は其面よ溢れ其美其艶人  
 をして覺えず恍惚たらしむ汝彼れの言を傾聽せよ其言より進る芳香  
 更よ甚し汝は恰も彼れの靈魂と面のあたり相對するが如くよして彼  
 れの愉絶快絶の談を聞て心融くるが如くならん。  
 ◎愛は心を安穩快活よして之を蘇し而して怨恨は之を壓迫煩悶せし  
 む凡そ人を恨む者は自ら己を苦め且惱すものよして愚人中の愚なる  
 者なり。  
 ○汝は身体の病よ犯さるゝを見ば主を怨まずして乃ち主は予へ主は  
 取り給ふ主の名は頌讚せらるべし(約白一の廿二)と唱ふべし汝は己の  
 身体を以て取り去らるべからざる私有物の如くよ見做すの癖あり是

れ抑も不道理の極なり何となれば汝の身體は神の家なればなり。

○司祭は是れ如何に高尚の人なるか彼は常主と直話し主は常彼の言に應答し給ふ其の祈るや則ち主と相語るものにして又主の之に對する答なり情慾襲ひ來らば司祭たる者争でか情慾の卑陋不淨なるを……就中其身を取りて……記憶し之をして常主全くイエススハリストのみを盈たすべき己の心裡に入るを許さざらんことを努めずして可ならんや司祭は天使として人非ず世事俗塵は彼遠く之を避けざるべからず主イエススよ願くは爾の司祭等義を衣せしめ(聖詠百卅一の九)彼等をして常主己の職の高尚なるを記憶し以て斯世と魔鬼の網に罹ることなく斯世の慮と貨財の惑及び其心に入來る其他の慾

(馬可四の十九)をして其心より遠ざくるを得せしめよ。

○魔鬼我が心に潜む時は我が胸と心と死ぬべく感ずる非常の重負と火ありて靈魂は窄められ闇味とせらるること甚しくして事毎に激せざるなく凡そ善なることと對しては嫌厭の情起り他人の己と對する言行は之を曲解し之を以て己は仇し己の名譽を傷くる惡意あるものとす故に之に對して深く毒々しき怨恨を抱き復讐せんとするの念勃々禁すべからず其果は由りて之を知るべし(馬太七の廿)我亦惡鬼と擾乱せらるゝの時あり。

○魔鬼が我靈魂に侵入して之を神より遠ざけ己の闇黒にして嫉妬深き兇殺的の全体を以て之に蟠居する途は多端多様なり苟も慾の萌す

ことあれば彼は之を以て侵入するの途とし聊かたりども之より入るの機会を見逃がさず、聖神の入る途も亦之と同じく多端多様にして即ち眞實の信仰、誠實の謙遜、神及隣に對する熱愛の途及其他なり、只禍なるは古來の兇殺者が百方を盡して吾人の爲に此途を壅塞せんとすることとなり、遠く神より離れたる吾人罪人の神に近づくと最も通常の途は自ら苦み且痛哭するよりあり、聖書も實驗も共に罪人の神に近づかんが爲めは苦を忍び哭泣して首鼠兩端の心を矯正せざるべからざるを證す、爾曹神に近づけ爾曹苦め哀め哭け、雅各四の八、九、涙は吾人の心の汚穢を洗ひ淨むるの効力あり又苦みよりて心の罪に染む幅は緊縮しその緊縮よりて涙は最も迷り易きが故に苦痛は必要なり。

○人間の不信に陥りたるは全く祈禱の精神を失ひ、或は之を有せざるに依るものにして、略言すれば祈禱せざるに依るなり、斯世の君は此の如き人々の心に横行濶歩して其主人公たるなり、彼等は祈禱を以て主の神の恩寵の露を請はざるに因り、神の賜は之を求め之を尋ねる者のみ降るなり、天性傷害せられたるの心は聖神の蘇生の露を得ずして乾燥し、其の乾燥の甚しきよりして遂に不信及び其他の愆の惡熾を發し、而して魔鬼は只管此の恐るべき火を保持する愆を燃起し、彼れの國を蹂躪したる者の血にて贖はれたる靈魂の滅亡するを見て拍手喝采す。

○朝の祈禱、神よ、世界の造物主及び主宰よ、此の朝に於て爾の神の像

にて修飾せられたる爾の造物を顧みよ願くは闇黒よして罪よ亡ばされたる我が靈魂を蘇し日光より億万倍も明かなる爾の目をして之を照さしめよ願くは我が憂鬱と我が懶惰を去り我よ快活と靈魂の勇氣を與へ我をして總ての時總ての場處よ於て欣々然として爾の仁慈爾の聖爾の無限の威嚴爾の無窮の完全を頌讚せしめよ蓋し主よ爾は我の造者我が生命の主宰にして爾の知能ある造物は總ての時今も何時も世々よ爾よ光榮を歸すべきなり「アミン」。

○人が己の旨よ由りて神よ背離したる時より恰も夫の初め家よ飼はれて後叢林よ放たれ野獸と爲りたる動物の如く己の昔の住所を見るを好まず昔の住所即ち神の樂園の光よりも寧ろ叢林即ち斯世の闇を

好み神と体合すること甚た難く之と体合するも亦屢々離れ神及び神の人よ啓示したることを信すること甚た難く常よ其心に信仰の天賜を守ることを慮らず。

○若し夫れ神は夫の草や花や木の葉の如きものすら照管せざることなしとせんには豈吾人を棄てんやア、各人宜く神が己の微々たる造物よ對しても猶且己の照管を垂るゝを確信せよ神が各造物に見えずして借よするを知れ救世主の言よ依るよ神は野の花を装ひ天空の鳥を養ふよ非ずや馬太六の廿六三十然らば神争でか己の造物たる吾人を樂ましめざらんや例へば花だけよても可なり神は恰も恩愛深き母の如く己が固有の能力と智慧とよ由りて年々歳々無より此の千紅万



紫の芳草を造り出す吾人は宜く之を以て樂み吾人の天父なる造物主を頌讚するを忘れざらん彼れの吾人よ對する愛よ酬ゆるよ自ら彼れを愛する心を以てせん。

○凡そ神が困難の場合よ於て吾人を救ふを信せず自ら失神する者は神に榮を歸せず神を常よ警醒する者と見做さず乃ち寝ぬる者若くは全能力なき者至善ならざる者と見做す者よして眞理の神を偽造し之よ由りて其の罪を犯すや大なり就中屢々神救世主より奥妙の佑助を受くるの榮を得たる者よして不信怯懦なるは恕すべからず吁我は多罪の人なる哉。

○見えすして満たざる所なきの神は屢々顯よ我の見えざる靈魂に觸

るよことあり我が靈魂は之よ觸るよ由りて奇々奥妙なる安慰と歡喜を感ず我よ我が神のを傳ふる者は目よ非ず耳は只言と音聲のみを以て我よ夫の端倪すべからざる者のことを告ぐるよ非ず之を傳ふるは乃ち靈魂自らよして彼は神と同化するなり。

○人々の怨恨憎惡汝の心を擾亂し汝をして煩悶せしむる時は全能公義の主神が汝を愛するの如何よ測るべからざる乎を思へ彼は暫く怨恨憎惡を容忍するも時到れば相當よ之を罰するなり汝は己の身己の舌己の身体の一部分をさへ制すること能はず是よ由りて汝は彼の全世界を統御し之をして驚嘆すべきほど秩序整然たらしめ怨恨奸惡よ充滿し常よ互に相亡ぼさんとするの傾きあるよも拘らず彼れの統御

の下に在りて災厄に遭遇するよりも寧ろ幸福を受くるの人類を治理する者の如何を判せよ。彼は斯く其種類の同じからざる多数のものを治むるの如何に全能睿智なるよ。汝は全然彼に依頼せよ。

○談神の機密に渉る時は心竊に如何にして斯く成るべきかと問ふ勿れ。汝は神が如何にして無より全世界を造りたるかを知らず。今又神が如何にして何物を秘密に造るやは汝の知る能はざる所且知るべからざることなり。何となれば汝は神に非ず。夫の限りなく睿智全能なる神の知る所のこと。汝悉く之を知る能はざればなり。汝は彼れの手の工にして彼れの微々たる造物なり。曾て一物もあらず而して今存在する所のものが神の言にて造られし時ありしを思へ。凡そ造られしもの彼よ

由りて造られざるなし(約翰一の三)

○祈禱する者よ。汝等の心を神に捧げよ。即ち汝等が己の子己の父母己の恩人己の朋友を愛し之よ由りて偽りならざる清き愛の妙味を感ずる愛情深き赤心なり。

○長時間の祈禱に於ては數分時間のみ眞に神の悦ぶ所と爲りて眞誠の祈禱眞誠の神に對する奉事と爲ることあり。祈禱に於て要務とする所は心を神に近づくるに在り。靈魂に神の在ります妙味を感ずるは之が證なり。

○汝の好む如くならで乃ち我の欲するが如くならんを」とは是れ罪に陥りて有罪なる憂愁の状態より脱せんと欲する吾人の靈魂の常に聞

く所の神の凜乎たる聲なり我の欲するが如くならんをとの意は心中深く罪に相當するの悔改を爲し我が指示する生命の途に立返れ若くは我が公義の定むる所に循ひ罪に相當するの罰を荷へ然らざれば汝の罪は我が律法に違背したるものとして汝を苦めんとなり吾人の靈魂の安慰を感ずるは實際心中に深く罪に相當するの悔改を爲し又は神の定むる相當の罰を負担したる時もあるなりア、冥に裡に吾人の無形の靈魂を治理する神の全能公義なる能力に總ての光榮は爾に歸す光榮は爾神我等の救主に歸す願くは爾の旨は我等の上で成らんことを。

○主の吾人を救ふこと何ぞ其れ便且速なるや瞬間突然不知不識の裡

に於てするなり予曾て日中大罪人たりしも薄暮及び祈禱の後義とせれら聖神の恩寵にて雪よりも皎潔と爲り心中に深き安和と歡喜とを懷きて眠り就きしこと屢々之あり吾人の生活の薄暮吾人の日の没に於ても主の吾人を救ふこと何ぞ其れ易々たるやア、至善なる主よ我を救へ我を救ふて我を爾の天國に入れよ爾は爲し能はざる所なし。彼れは立つも或は倒るゝも皆己の主に依る且つ彼必ず立たん蓋し神能く之を立るの力あるなり『羅馬十四の四』

○凡そ物の何たるを問はず其最要部を占め其生命たるものは造物主之を其奥の深き所其物の内部に秘藏し吾人到る處之を見ざるなし人よ於ても亦然り靈魂は人の中心なる心に在り故に靈魂を心と稱し而

して心を靈魂と稱すること往々之れあり。我が靈は我の裏に悶え我が心は我の裏に曠きが如し(聖詠百四十二の四)神や潔き心を我に造り正直靈を我の裏に改め給へ(同上五十の四)

○我等の神は宏慈矜恤寛忍の神にして(聖詠百二の八)外苦と罰の神に非ず。苦痛は吾人と神に背きたる諸靈の罪の結果なり。故に汝若し眞實憂悲せば専ら罪と魔鬼とを罪し否寧ろ己を罪せよ何となれば魔鬼と雖も汝に寄付くべき發端を得ざれば汝に如何なる害をも加ふること能はざればなり。

○我は嫉妬の神なり(出埃廿の五)我は我が榮を他人に付せずと(以賽亞四十二の八)此の榮光の主の言は聖なる機密にて我が裡に行はるゝ

我が神の所爲の榮を以て心窃し他の者も歸し誠心彼に之を歸せざる毎に我も應驗す。此の如くする時は神は夫の常と奥妙として人よ生活力を賦する己の機密の榮の爲に忽ち嫉妬し己の公義なる審判を以て己の父たる杖を以て我が靈魂を罰す。此時我が靈魂は明に主の「我は我が榮を他人に付せず」といへる言を聞く。爾は我の機密に於て汝自身の爲に明々白々たる我も歸すべき榮を我も歸せざる爲に我は我が公義の杖を以て汝の裏心を撃ち汝をして我は決して我が榮を何人も歸せざることを知らしめ且之を確信せしめんとす。我は汝の罪を淨め我が血にて汝の靈魂を雪よりも白くし我は安和と喜悅とを以て汝に臨み我は恰も母の嬰兒に對する如く汝を暖め汝を嬌し汝に我が柔和と

謙遜とを賦し我が愛を汝の心よ注ぎ我は汝全体を改造し汝を化して  
汝の自ら驚くが如く新人と爲せり我争でか我が所爲の策を他人よ付  
すべけんや否我は永遠不變なり我は人の如く謊ることなく人の子の  
如く渝ることなし『民數紀二十三の十九』

○見えざる主の我が靈魂よ感應すること恰も目よ見ゆるが如く且現  
よ我が前よ在りて我が總ての意思と感情とを知る者の如く内心の懶  
惰或は執拗は皆常に我が爲よ相當の罰之よ伴ふ要するよ我が内心の  
意向よして神よ適せず彼の聖よ合はざるよ於ては我は我が心よ焰々  
たる火の罰を受け適合する時は我は愉快安全なり。

○否爾か言ふもの、人は時として己れよ依らず魔鬼の熱心なる煽動

よ由りて甚しく激怒し深く人を憎むことあり汝が激怒し或は憎みて  
眞よ或は冤罪的よ汝の仇敵と見做す所の者を滅さんと欲する時は只  
己れ若くは其人のみを注視す汝試よ之よ次て時として守護神使の作  
用よ由りて幾くもなく汝若くは汝の注視する人よ起る所の安慰温和  
善良を以前の之と相反する情態よ比較せよ汝必ず曰はん否恐くは是  
れ今より少しく前よ私の憎み私の怒りたる人よ非ず是れ(溫柔謙遜に  
して)衣を衣自若としてイエスの足下よ坐せる悪鬼の離れたる人な  
り(路加八の三十五以前の憎惡以前の淺慮の影だも彼よ無しと世よ惡  
鬼の存在を非とする者あれども人々の生活上よ於ける斯る現象は明  
よ其存在の疑ふべからざるを證するよ足る若し夫れ此よ現象あれば

必ず之が相當の原因あり其果は依りて其樹を識るとせんは誰か夫の妄は激怒する人悪鬼の其心中は潜みて作用するを認めざらんや誰か人の憎悪の溢るゝ内は之れが主動者あるを認めざらんや怒勃々として憎悪燃るが如き人は己の胸裡は人仇する惡勢力の伏在するを感ずること最も明かなり彼が人の靈魂は起す所の感情は救主が己の臨在に就て言ふ所は全然相反せり救主曰く我が軀は易く我が荷は輕しと馬太十一の三十然るは彼れの伏在する時は汝の感情は身靈共に非常に不快にして且苦かるべし。

○汝が聖堂に於て最も多く聞く所のものは聖役者誦經者唱歌者の我等を憐まんことを祈るの聲なるべし是れ果して何故ぞ他なし吾人は

神の聖堂に在る者幾人なるよせよ皆等しく己の罪にて神の罰を受くべき者たるを示すものにして就中吾人が聖堂に入るよ及び吾人は皆罪人として毎日毎夜己の不義にてその怒を激したる天地の主造物主及び施恩者の前に各己の爲め并ハリスティアニシたる愛情は由りて他人の爲は慈憐を請ふよ來れることを記憶せざるべからざるを示すなり慈憐を請ふの祈禱は小聯禱あり又重聯禱あり而して聖堂に於ては一も冗言を發せられざるよ由り重聯禱の歌の時よは其聯禱の初は我等皆靈を全うして曰はん我等の思を全うして曰はんと云ふが如く殊更熱心に中心より誠心痛嘆して神に祈らざるべからず此時は些の冷淡たりとも些の不注意たりとも之を棄て謙遜の精神

燃ゆるが如く十分注意して立ち造物主よ我等罪人を憐れんことを熱心よ祈るべし而も吾人が聖役者の重聯禱大聯禱を唱へ上げ唱歌者の歌ふ時よ於て見る所のもの何ぞ多くは夫の祈禱する者の例の不注意と冷淡となり。

○宜きに適はずして領聖したる後に於ける如く不當冷淡の祈禱の後よも靈魂は等しく不快を感ずるなり是れ主が吾人の心中の不信と冷淡よて侮辱されたる者として自ら吾人の心よ入らず乃ち悪鬼をして吾人の心よ巢窟を作らしめ以て己の鞭と彼れの鞭の輕重如何を感せしめんとするが爲めなり。

○畏るべき眞理 悔改せざる罪人は死後改善よ赴く總の方便を失ふ

故よ不變不易永遠の苦よ付せらるゝなり罪は苦なき能はず何を以て之を證するか他なし或罪人の現狀と罪の性質一人を己の俘囚として其の出口を悉く梗塞する罪其者の性質よて明よ證せらるゝなり罪人が神の特別の恩寵よ依るに非ずんば其の好む所の罪の途より翻然として徳の道よ移るの如何よ至難なるやは人誰か之を知らざらん罪が罪人の心中と其全体とよ深く其根を下し罪人よ己の視官を與へ其目を眩惑して物を見るに實体と全く異ならしむ故よ吾人は罪人よして改心歸正せんことを思はず自ら大罪なりと思惟せざる者最も多きをみる是れ自惚と驕傲の其目を昏ますよ因るなり若し自ら罪人なりと思惟することあれば失望落膽限りなく之よ由りて其智を味まされ烈

しく其心を剛愎ごうへきよす罪の性質たる吾人を闇味あんまいよし吾人の手足を束縛そくわくするものなるに依り凡そ罪人たる者神の恩寵おんちゆうよ由るに非ざれば誰か改心かいしんして神に歸する者あらんや然れども恩寵の作用を受くるの時機ときと場所とは只此世に在るのみ死後しごよは教會の祈禱きたうありと雖も悔改くわいかいしたる罪人よして斯世より携へ往きたる善行の光を靈魂れいこんよ受け納め神の恩寵おんちゆうの祈禱きたうの之れに接するを得べき者よ對して其作用を及ぼすのみ悔改せざる罪人は疑ひもなく滅亡の子なり我が罪の俘囚こごと爲れる時の實驗は如何なるか我を剛愎ごうへきよし我をして神の慈憐じれんを蒙かうむるを得ざらしむるに依り我は時として終日只苦惱するのみよして心を傾かたむけて反正する能はざることあり罪は我が能力を束縛するに由り我は火

の中うちに在りて焼け甘んじて之に安んず斯く我は内心鐵鎖てつさよ縛せられたる者なるを以て神は我の無能力我の謙遜けんそん我の熱涙ねつなみを見て我を憐あはれ我よ己の恩寵を賜ふまでは我れ神に歸ること能はず罪よ陥りたる人を幽暗中の縲紲いささよ縛せられたる者彼得後二の四と稱するは偶然ぐうぜんに非ず。

○汝の屬神的ごくしんてき生活は截然相異なる二の情態じやうたいに分たる即ち心中の安和あんわ喜悅快活きえつくわくの情態と靈魂の憂悲恐怖煩悶ゆうひきふはんもんの情態なり甲の情態の原因は常つねに我が靈魂の作用と造物主の法則との符合ふあに在りて乙の原因は神の聖なる法の違背ちがいに在るなり我は常つねに彼れ此れの情態の原因を識別するを得且實際識別し彼れ此れ常つねに我が意識いしぎに存す故に憂悲煩悶の



情態の因て起る所の原因を撲滅せば其結果たる靈魂の憂悲煩悶をも消滅するは汝等の常々經驗する所ならん。

④爾自らイイスス、ハリストス爾の中ニ在るを知らざるか爾宜く自ら試むべし(哥林多後十三の五)ハリストスは誠ニ我が中ニ居るなり而も我は今に至るまで試みざりき即ち主の我に居るを考へず之を確知せざりしなり彼れ至聖者は我が心中の微々たる不淨すら之を嗅ぐこと敏として我をして心中の罪の萌芽たりとも靈魂より逐ひ出さしめんとす然れども嗟呼哀哉夫の歩む毎に我を吞噬せんとする撒但も亦争ふて主より我を奪はんとす。

⑤汝等他人の罪の赦さるゝを祈ること須らく己の罪の赦を得んこと

を祈るが如くすべし汝の罪が汝の靈魂をして憂悲煩悶せしめば汝は痛嘆流涕神の憐みを垂れんことを祈るべし此の如く他人の救贖を祈るよ就ても己の救贖を祈るが如くすべし汝若し之を成し遂げて之を習慣と爲すよ至らば他人の救贖に同情を表する靈魂を愛する聖神の靈賜を主より豊かに受るを得ん何となれば吾人にして彼に抵抗せず我が心を剛復せせずんば彼れ至聖の神は自ら吾人を悉く救はんと欲するよ汲々たればなり聖神自ら言ひがたきの慨歎を以て我儕の爲に祈りぬ(羅馬八の廿六)

○吾人は神が吾人の智と心とを賦したる所のものを屢々他人より聞き又は往々他人の文書を於て讀み以て自惚ることわり即ち吾人は

他人が己の意に最も適するの理想を懐くを見て是れ彼が我より剽竊したるものなりとし其理想全く新よして我が獨占の思想なるが如く  
 想像すること往々之あり是れ自惚思想なり何を以てか之を言ふ他  
 なし知識の主神眞理を尋ぬる人々よ對する彼れの神豈惟一よ非ずや  
 斯世よ來る總ての人を照らす(約翰一の九)吾人の教化者は豈惟一よ非  
 ずや光榮は惟一の者よ歸す光榮は衆人を愛して衆人よ豊かに己の靈  
 形の賜を賜ふ者よ歸す光榮は人を偏視せずして己の愛と全能と睿智  
 の秘密を赤子に顯はす者路加十の廿一よ歸す  
 ○神の聖人は信仰篤き者の心よ近く其の信實なる良友として信と愛  
 とを以て之を呼ぶの敬虔忠實なる者を助けんとす此世の救助者の援

助を請ふの場合よは多くは人を使はし且時として其の來るまで久し  
 く待つことありと雖も此の心靈的の救助者よは使を遣はし又久しく  
 待つ之要なく祈禱者の信仰は瞬間よ彼等をして汝の心の裡に立たし  
 め信仰よ由りて汝よ十分よ心靈的の扶助を受くるを得せしむ予の言  
 ふ所は我が實驗よ徴して言ふのみ予が諸聖人就中我等の女宰生神女  
 の代求保護よ由りて心中の悲哀より救はるゝこと屢之れあるは即ち  
 其證なり或は之よ對して开は單よ信仰の作用即ち確然己の必ず悲哀  
 より救はれんとするを信するよ依るものよして聖人の神の前よ對す  
 る保護に依るよ非ずと曰ふ者あらん否然らず何よ由りて之を知るか  
 他なし予は熱切の祈禱よ於て我が知る所の聖人(何人たるを問はず)を

呼び心の目よて之を見るよ非ざれば如何よ彼等の佑助を藉らずして  
 救はれんとの念慮あるよせよ何等の佑助をも受けざるなり予の佑助  
 を受くるは實よ我が其人に對して活信を懐くよりして呼び上くる所  
 の聖人の名よ因ることは予の確認感覺する所なり此事たる世間普通  
 の道理と異なる所なし予は初め心中の信仰よて己の幫助者を見之を  
 見るよ及んで同く心にて冥々裡よ一されど己れ自身よは判然と一彼  
 等よ祈願し而して後無形の佑助を全く目よ見えざる有様よて一され  
 ど靈魂よ取りては明々白々と一受け之を受くると共よ此佑助が實よ  
 彼等に由りて予へられたることを確信すること恰も醫師よ癒された  
 るの病者が他人に由らず其醫師よ由りて癒され其病の自然よ癒えず

して實よ醫師よ依りて癒されたるを確信するが如し此等の事の行は  
 るよや甚だ單純よして只目よて見るを要するのみ。  
 ○我は人なり而して神の矜恤と眞理と公義は絶えず我が衷よ其作用  
 を顯はず神は或は我を恤み我を慰め或は我内心よ神に反對する感情  
 起ることあれば我を罰し我をして憂悲惜く能はざらしむ然れども我  
 よ等しき人間は此他に充滿せりされば主は彼等よ對して己の矜恤眞  
 理公義を顯はすこと亦猶我よ對するが如くならん彼は總ての事を總  
 ての人の中よ行ふなり(哥林多後十二の六)  
 ○何人たりども罪を以て瑣々たるものと思惟する毋れ否罪は今世よ  
 於ても來世よ於ても靈魂を殺害する恐るべき惡なり罪人は來世よ於

て手足を縛られ(靈魂)就て言なり(救主の)彼の手足を縛りて外の幽暗に投せよ馬太廿二の十三)と言ふ如く外の幽暗に投せらる即ち彼の靈魂の諸能力は自由の動作を爲すに造られ乍ら全く其自由を失ひて善を爲すに無能と爲り靈魂よては己の能力あるを感ずるも之と同時に其能力は打解くべからざる鍵鎖よて縛せらるゝが如き思を爲し各其罪の繩よ繋かるゝなり(箴言五の廿二)加之罪人は又此世よ於て無分別の事を爲したるを悔悟し造物主の怒を招きたるを想像して己の罪の爲め苦心すること幾何ぞや且夫れ罪は斯世よ於ても靈魂を束縛殺害するものなり苟も敬神の徒よして誰か其の罪を犯せし時靈魂の如何に苦痛煩悶し炎々たる猛火の如何よ其胸を焼くかを知らざる

者あらん吾人若し斯世よ於て誠心罪を悔い過を改むるよ非ざれば彼の罪は一時靈魂を束縛殺害しつゝ亦之を永遠に殺すなり茲よ罪が一時及び永遠に靈魂を殺すの實驗的證を擧げんか若し敬神の念深き人偶々日中よ犯して其心を苦めたる罪を悔いずして寢よ就きたらんには誠心其罪を悔い熱涙を以て己の心を洗滌せざる以上は終夜苦心して止む時なかるべし(是れ實驗なり)而して其罪の苦みよりして暖き夢を破らるゝことあるべし是れ罪の繩よて縛られたる靈魂の壓束せらるゝが故なり今若し假りよ罪を犯して寢よ就き罪よて其心を苦めらるゝ者夜間俄に死に襲はれたりとしたらんよは其靈魂が苦みを懷きて彼の世よ移り而して死後よは悔改の餘地なきが故己の罪の程度よ

從て苦痛煩悶すべきは豈當然に非ずや。聖書も亦之を證す(馬太廿五の

四十六、羅馬二の六、九、哥林後五の十及其他)。

○須く己を省み己の慾を注視せよ。就中家裡に於て然りとす。家裡に於ては恰も土龍の安全の場所に於ける如く自由自在に跋扈するなり。家の外に於ては甲の慾は通例他の更に体裁善き慾にて蔽はるゝと雖も家裡に於ては吾人の靈魂の完全無缺なるを齷食せんとする此の醜き土龍を驅逐するに由なきなり。

○敬虔にして神を敬ふ人の靈魂は冥々裡に神と靈妙的の親交を爲す。主神は父若くは嚴格なる師の如く吾人の意思希望を或は嘉みし或は非難し或は此を是なりとし或は彼を非なりとし善を行へば賞し惡を

行へば罰す而して此等の事たる皆靈魂に取れて明かなること掌上に指すが如し。

○汝は先づ小事に關する誠を格守せよ。然らば汝は大事に關する誠を行はん。小事は大事に導き至らしむるものなり。縦し汝は水曜日金曜日守齋の誠又は惡意邪念を禁ずる第十の誠なりとも先づ之を格守せよ。然らば汝は諸誠を實行せん。小事に忠なる者は大事にも忠なればなり(路加十六の十)。

○朽る生命のみ意を注ぎ在天無窮の生命のことを慮らざる人よ。汝が斯世の生命が果して如何なるかを思へ。是れ吾人の生命の火を燃し以て其火を消滅せざらんが爲め吾人の寓居(身体)を云ふをして暖かな

らしめんが爲め并よ其生を犠牲にして吾人の身体の生命は供する他の活造物の有機体の發育的要素を以て常に移り替る吾人の身体の生命を恢復せんが爲め常よ薪材(食物)を供給する所爲なるのみ人よ實に汝の生命は如何に微弱なる蜘蛛網なるよ汝は之を固めんが爲め其内よ日二たび支柱を立て即ち毎日二回飲食を以て其体を養ふを云ふ又靈魂をして身体の外に居らしめず乃ち身体の裡にて之を暖め之を活さんが爲め毎夜恰も家の窓を閉づるが如く五官を閉ぢて己の靈魂を身体の内よ閉込む汝の生命は如何よ微弱なる蜘蛛網にして之を破ることを容易なるや汝は須らく無窮の生命よ對して恭謙なれ敬虔なれ

○真理は凡そ創造せられたるもの、基なり汝の行爲(内外の)よ於ても

真理を以て万般の基と爲し就中祈禱の基と爲せ真理を基として汝の生命汝の行爲汝の意思汝の希望を悉く之れよ繋ぎ飾れよ

○試よ一日たりとも神の誠よ從て消光するの勞を執れ然らば汝は自ら神の旨を行ふの如何よ快さかを知り心よて之を實驗せん(神の旨は吾人よ對して吾人の生命、吾人の永遠の幸福なり汝等が己の兩親及び恩人を愛するほどなりとも心を盡して主を愛し己の力の及ばん限り彼の汝よ對する愛と恩恵とを計り見よ)即ち彼が如何よして汝よ存在を與へ且之と共よ諸の幸福を與へたるか彼が如何よ限りなく汝の罪を容忍したるか汝等の誠心痛悔したる爲め己の獨生子の十字架の苦と死との力よて如何よ限りなく汝の罪を赦したるか汝若し彼よ忠順

なるよ於ては彼は永遠に於て如何なる幸福を汝に約したるかを心算  
 するよ其の恩恵や限りなく大にして且無量なるべし次は諸人を愛  
 すること己の如くすべし即ち凡そ己の欲せざる所のことの彼は行は  
 れんことを望む母れ彼の爲に思念し彼の爲に感覺すること己の爲に  
 思念感覺するが如くし己の身は遭遇するを欲せざる所のことは彼は  
 遭遇せんことを望む母れ汝が他人に加へたるの害の忘れられんこと  
 を望むが如く他人が汝に加へたるの害を記憶し止むる母れ己の爲め  
 もも他人の爲めも故意に有罪なること若くは不淨のことを想像す  
 る母れ他人をも己の如く好意あるものと見做すべし要するは彼等の  
 悪意あること明ならざる以上は彼等の爲に竭すこと己の爲に竭すが

如くしたとひ竭さずとも己の爲に行はざることは彼等よ之を施す母  
 れ然らば汝は己の心の如何に平穩にして如何に幸福なるかを感せん  
 汝は樂園に逝くよ先だちて己は樂園に在り——在天の樂園に到るよ先  
 だちて此世の樂園に在らん救主曰く神の國は汝等の衷に在りと路加  
 十七の廿一使徒教へて曰く愛し居る者は神に居り神は居る者は神亦  
 彼に居ると約翰第一書四の十六

○神を拜するよ靈と誠とを以てせよ例へば汝は誠を以て願くは爾の  
 名聖とせられんことを唱ふ汝は實際神の名が人々及び汝の善行よて  
 聖とせられんことを欲するか汝は『爾の國來らんを』と唱ふ汝は果して  
 神の國の來らんことを望むか汝は神の神の宿る所と爲り罪の棲む所

と爲らざらんことを望むか汝は反て罪の裡に生活することを深く望まざるか汝は「爾の旨天に行はるゝ如く地にも行はれんを」と唱ふ汝は神の旨よりも寧ろ己の旨の行はれんを求めざるか噫實に然り汝は又「我等の日用の糧を今日我等と興へ給へ」と唱ふされど汝は己の心よ之と反對の事を唱へ我は爾よ之を求むるの必要なし我は求めざるも所有す所有せざる者は宜く斯く唱ふべしと云ひ或は我は多くのものを求めて貪婪匿くを知らず少なるもの若くは神の吾人に賜ひしものを以て足れりとせず我が有する所の者の爲め感謝するの意なきも感謝せざるべからずと云はざるか汝は祈禱に於て「我等よ我等の債を免すこと我等が我等よ債ある者を免すが如くせよ」と神よ求む而も汝は

自ら心よ我は罪人よ非ず我が品行は敢て他人に劣らず我は我が債若くは罪の赦しを請ふの必要なしと思惟せざるか或は汝は祈禱しつゝ不満忿怒の念を懷き神よ祈禱するに當りて神よ詐らざるか汝は「我等を誘ふ導く勿れ」と唱へつゝ敢て誘はるゝことなく自ら進んで諸罪を犯さるるか汝は「我等を兇惡より救へ」と唱へつゝ自ら奸惡の徒と交はり魔鬼を首とする諸種の惡と親しまざるか汝は須らく慎んで汝の舌をして汝の心と齟齬せしむる勿れ宜く自ら省み祈禱に於て神よ詐る勿れ汝は主經を唱ふる時よ又他の祈禱を唱ふる時よ常よ之を旨とし汝の心は能く汝の舌の言ふ所よ符合するや否よ注意すべし。  
○心清ければ清きは廣濶にして多く愛する所のものを容れ不淨な



れば不淨なるほど狭くして愛する所のものを容るゝこと少く、只己れに對する愛を止まり而も其愛や邪よして不死の靈魂に不相當なる事柄—金銀酒色等の愛を溺るゝなり。

○主若し施生の十字架を勝たれざる測るべからざる神聖の能力を付するとせんよは己の体血の至潔恐るべき施生の機密よ吾人の天性を改造する測るべからざる能力を傳ふると爲すも亦何を怪まん。嗚呼主よ爾は何ぞそれ偉なるや、爾の作爲は何ぞ其れ奇なるや、爾の全能は何ぞそれ無窮なるや、爾の能力と爾の恩寵の觸るゝものは自ら施生的と爲るなり。

○汝若し人の缺點を矯正せんとせば自己の手段のみを以て矯正し得

可しと思ふ毋れ、吾人自ら己の慾例へば傲慢及び之より起る激昂よて寧ろ事を破ること多し乃ち汝の重任を主よ負はしめ(聖詠五十四の廿三)吾人の心腹を試むる(同上七の十)の主よ誠心祈禱して彼自ら人の智と心とを啓發せんことを求むべし、彼若し汝の祈禱が愛よて燃え赤心より出るを見れば必ず汝の心の望を成し遂げ汝は直よ己の祈れる人の豹變したるを見て是れ至上者の右の手の變易なり(聖詠七十六の十二)と謂はん。

○夫の不風流無形式なる地質を化して斯くも靈妙清奇艶麗の花と爲す者は果して誰ぞ、夫の地質よ斯くも驚嘆すべき形式を興ふる者は是れ果して誰ぞ、造物主よ吾人をして夫の花よ於て爾の靈智、爾の仁慈、爾

の全能に接吻するを得せしめよ。

○吾人の精神上の意嚮は縦令外面に顯はれざるものと雖も他人の感情に反應すること頗る強きものなり人悉く之を認めずと雖も到る處皆然り我他人に對して怒り又不快の念を懐くときは彼も亦之を感じ同じく我に對して不快の念を懐くに至る即ち身体の官能の外は吾人の靈魂の互に相交通する何等かの方法あるなり五官は由りて靈魂の作用を他人に及ぼす一段に至りては視官に由りて靈魂の他人に其作用を及ぼす程驚くべきものならず即ち遠く相隔つと雖も吾人の目も視ゆるの位置に在る人は向ひ吾人が之を凝視する時之は作用を及ぼすことあり例へば吾人は人を諦視し之をして周章狼狽せしむること

あり予曾て我が窓より我が家の側を通行する人を諦視せしむれば一種の勢力に引かれたる如くにして余の諦視し居る窓の下より來り窓を眺めて此より人影を尋ぬるが如くせしを見しこと屢々之れあり或は又忽ち其歩を早め容姿を正し襟飾を直し帽の冠り方を改むるなどの舉動を爲せしものあり茲は何等かの秘密なくんばならず。

○汝は己の衷に施生的の神と汝の靈魂を殺害するの神とを分別せよ汝の靈魂は善良の意思を存する時は汝は幸福にして爽快なり汝の心安穩にして怡々たる時は是れ善神聖神は汝に居るなり而も汝不善の意思を懐き若くは心中に不善の動作起る時は不快懊惱たるべし斯く汝の心中煩悶する時は是れ惡神奸惡の神汝に居るなり吾人の衷に奸

悪神の神居る時は心中懊惱悶々として心よて主よ近づくの難さを感じず  
 是れ悪神の其靈魂を束縛し之をして主よ向はしめざるも依る也。奸悪  
 の神は猜疑不信情慾懊惱憂悲煩悶の神にして善神は確然疑を容れざ  
 るの神諸徳の神心靈的自由快潤の神平和及び喜悅の神なり汝は須ら  
 く此等の徴候に由りて何れの時汝よ神の神居り何れの時悪神の汝よ  
 居るかを知り汝を蘇し汝を聖よする至聖の神に感謝の念を懐きて成  
 るべく屢々其心に向け力めて疑と不信と慾とを避けよ夫の竊盜及び  
 吾人の靈魂の兇殺者たる無形の蛇は此等と共に吾人の靈魂よ潜み入  
 らんとするなり。

○敬虔なるハリステイアニシの度生中よ於て神よ棄てらるゝの時―悪

魔的暗黒の時あり斯かる時よは其人赤心神を顔んで云ふ没せざるの  
 光よ爾は何故我を爾の顔より斥ぞけしや蓋し視よ執拗奸悪なる撒但  
 の暗は悉く我が靈魂を蔽ひ我が靈魂は暗澹たる地獄の苦を預想せし  
 むる彼れの幽暗よ壓せられて懊惱よ堪へず救世主よ請ふ我をして爾  
 の誠の光に歸らしめ我が靈道を直うせよ我れ熱切爾に祈る。

○悪神の姦計の作用を其身よ實驗せずんば善神の汝よ賜ふ所の恩恵  
 を識らず之を尊ぶべき所以を知らざらん殺害的神を知らずんば施生  
 的の神をも識らざらん善と悪と生と死との正反對の故よ由りてのみ吾  
 人は明よ彼と此とを識別する也身体若くは靈魂の死の災難危険よ遭  
 遇せずんば此等の災と精神的の死とより救ふの救世主及び施生者を

も識らざらん、噫、イエスは我が心の慰藉、喜悅、生命、安息及び快潤なり。光榮は睿智、至善の神に歸す、彼は惡と死との神をして吾人を誘ひ、吾人を苦ましむるを容さなければなり、然らずんば吾人如何にして恩寵の慰藉、撫施生の神の慰藉とを貴ばんや。

○主神は自ら生命及び生命の潤澤として永遠より自ら―神學者聖グリゴリーの言ふ如く―三位に於て働さ而して依然三者たり、即ち神は父言及び神なり、汝問ふて曰はん、神は三位なりとは何ぞやと、我答て云はん、我其故を解せず、只斯く爲らざるべからずして、然らざるを得ざるを知るのみ、汝又問はん、神の第三位は何故神と稱せらるゝか、左なきだ、神は神なる、彼は何故、特、一位を爲すかと、我之、答へん、神の神

の神と稱せらるゝは受造物に對してなり、主は己の個位的神にて氣を嘘き而して、彼れの施生的神の指示に依りて、無數の神は顯れたり、天の全軍は其口の氣(神)にて造られたり、聖詠卅二の六、彼はその氣(神)を人間の体、嘘き入るれば、人即ち生靈と爲りぬ、創世二の七、而して此息よりして、今に至るまで人々は生れ且世の末に至るまで、生れよ繁殖よ、てふ、誠、創世一の廿八、は循て生まれんとす、若し主は己の神にて、斯く個体的個々の物を造りたりとせん、は神の神そのものは、豈自ら個位、即ち個体的造化者、非ずして可ならんや、神は己が任、吹く、約翰三の八、視るべし、聖神は神の一位として、神と稱せらるゝを、若し夫れ造られたる個体的の神(靈)勝て、數ふべからざるはとありとせん、は、神豈自ら神なく

己の獨立個位的の位なくして可ならんや而して父の個体的有生の睿  
 智たる子亦豈神よ不必要なりとせんや汝先づ己を省みよ汝は受造物  
 なり而も多くの人をして驚嘆措く能はざらしむる睿智汝に在り汝は  
 時として甚た驚くべき物を造り而して人汝を稱揚して其物の造者と  
 爲すことありされど汝は是れ微々たる劣弱の造物よ非ずや汝今自ら  
 判せよ神豈よ個体的の睿智なくして可ならんや神豈よ造物者たらず  
 して可ならんや神豈よ己の有生固有の睿智を有せずして可ならんや  
 試に森羅万象を見よ何ぞその睿智なるや極めて微々たるものよすら  
 驚くべき睿智顯れ最上睿智の意思の驚くべきはと精確よ間然すべか  
 らざる潔白を以て實行せらるゝの形迹何ぞ其れ異なるや神豈よ個体

的睿智なくして可ならんや試よ思へ神は多く有智聰明よして個体的  
 有生のものを造り乍ら自ら己より個体的の睿智を生せずして可なる  
 か是れ果して理の當然なるか是れ果して有り得べきことなるか此事  
 果して造物主の完全の徳よ適應するか夫れ然り故よ神よは神父より  
 出でよ子よ居るの施生的(聖)神の有る如く個位的睿智若くは父の個位  
 的言なかるべからず汝よは物質無個体的の氣息あり自ら生命たる神  
 よ在りては個体的よして横流せず乃ち單純よして萬事よ生を施すの  
 神即ち是なり

○肉の靈を御する非天然の勢力は就中夫の靈が恰も肉の裡よ葬られ  
 たる如く肉よ束縛せられたる如き狀よ於て表顯す神よ事ふる件よ關

して此現象殊に明著なりとす即ち斯かる場合に於て人は寧ろ只口よ  
 て肉よて偽りて神よ近づき彼を拜するよ心を以てせず靈を以てせず  
 眞を以てせず實よ吾人は往々恰も吾人の理よ靈なきが如くよして生  
 活す夫の風俗壞亂の甚しき所以は靈の全く撲滅せられ人が恰も肉体  
 のみと爲れるが如き情態の結果なり我が神(靈)永く人と争はじ彼は肉  
 なればなり』創世記六の三試よ人の敬神の實況を熟視せよ汝等肉の靈  
 よ勝を制せんと努むるを見ん聖人輩よ至りては靈の肉よ勝を制する  
 所以後等が靈よて生活し總ての世界よ於て靈を見万事よ於て神の睿  
 智全能仁慈を見るよ由りて明かなり總ての現象よ於て總ての事件に  
 於て彼等は靈の記號を見るなり只感情的の人よ至りては肉の靈を凌

駕すること彼等が万般の事よ於て只彼等の五官よ觸るよものよみを  
 見俚諺よ所謂鼻より先を見ざるよ由りて明なり感情的肉体的の人は  
 此世界を見て殆ど之を無智なる動物の如くよ見做し造物主の睿智全  
 能仁慈よ驚嘆せず聖書を讀むも只其字を視るのみ祈禱せんか機械的  
 よ智よて祈禱を通誦するのみよして其精神よ徹底せず靈を以て眞を  
 以て拜するの方を知らざるなり肉は教育上よも跋扈せり試よ視よ學  
 校よ於てハリストス教の至緊至要の事理たる祈禱を教授するか神を  
 觀ることを教ふるか肉は世の末よ至るまで此世よ跳梁跋扈し主は審  
 判せんとて來るとき信を世に見んや路加十八の三而して不信は初め  
 の世界の人よ於けるが如く肉の爲す所なり。

○神は光及び眞理なるが故に人心に及ぼす所の作用を人認められんことを欲す而も魔は暗及び偽なるが故に之を恐るゝこと甚し暗は己の行を詰責せられんことを恐れて光に近づかざるなり魔は暗より欺騙より由り偽より由りて有力なるのみ其偽を詰責して之を明煌々たる所より曳き出し見よ悉く雲散霧消せん彼は欺騙を以て人を有らゆる情慾を誘ひ入れ彼は欺騙を以て人を眩惑し之をして事物の實情を見せしめず魔の被覆は蔽はるゝもの甚だ多し。

○有罪の靈魂が誠心其罪の甚だ無分別なること其の有害なること其の虚偽なることを感覺するより先だちて赦免せられざるは何故ぞ他なし心は乃ち吾人の靈魂なるが故なり靈魂が曾て罪を犯し之を以て快

と爲し美事と爲せし如く之を痛悔して其の有害なるを認め全く之が虚偽たるを確認せざるべからず此痛悔の心中に不愉快な行はるゝこと猶罪の望の通例其心は熟する如し。

○汝の衷に賢々聲を揚げ苦やしき言よて溢れ出でんと激動する兇惡の爲め心を煩す母れ乃ち之に命じて汝の衷に沈黙せしめよ死せしめよ然らざれば汝の聽従するを見汝の舌より流れ出づるは慣れて汝を御するに至らん夫の土堤に堰止めらるゝの水が罅隙を見出して漸々之を掘り崩し吾人若し之を塞がず若くは不充分な塞ぎたらんは堤の外に漏れ出でて遂に吾人の漸々手緩くなるに其の屢々盤回むるとよ由りて水は強く迸り出で日を経るに從ひ益々烈しくなりて遂に之を

塞ぐこと甚だ難く或は到底塞ぐこと能はざるに至らん人の心中に隠るゝの兇惡も亦猶是の如し吾人若し之をして突出すること一二三回ならしめば益々烈しく溢れ出で、遂には全く汝の堤防を破壊埋没するに至らん汝須らく聖詠者の言ふ如く靈魂は兇惡の水あるを知れ曰く『水は至れり』と(聖詠六十八の二)

○汝神は對して罪を犯し汝の罪汝を苦め汝を焼かば速に罪の爲よせる惟一永遠の活きたる犠牲のことを思ひ此の犠牲の前は汝の罪を抛擲せよ然らざれば汝は何處よりも救を得るの途なかるべし決して自力よて救はるべしと思ふ勿れ。

○主は己の體よて全世界—天地—を造り或は世界を造らすして其代

り己の體の殿を造り得べきも只汝の爲め汝を救はんとして自ら汝の體よ等しき體を造り給ひ既は無より世界を創造しつゝ其の少き物質より汝を活さんが爲め己の體を造り世界をして依然その造りたる儘ならしむア、神の仁慈や深し吾人は彼れの施生的機密を受くる故に因りて『彼が肉より出て彼が骨より出でたり』(以弗所五の三十)

○世界は有世睿智なる神の造る所なるを以て生命充滿し到る處事毎に生命及び睿智あり万般の事物は於て全體に於ても部分に於ても意思の表顯を見ざるなし是れ敢て明白ならずとも聖書に依るが如く研究して神を識るを得べき現實の書なり世界の有らざる前には只有無限の神のみ存在せり世界が無より起されて有と爲りたる時神は固



より有限と爲りたるは非ず、生命と無限とは完全として依然神は存し  
而して此生命と無限の完全は數ふべからざるほど多く、皆等しく生命  
を賦せられたる有機體造物にも反照したるなり。

○世界就中人間の有限なること―世界は有形の造物をして無限の裡  
に沈滅せざらしめん爲め之を支持するものなること、神言の書が世界  
に就て言ふ所のもの世界其もの若くは地層の配置よりも正確にして  
且つ明晰なり、萬有の裡に在るその書は死文且つ無聲にして毫も確乎  
たることを明言せず、人よ地の基を置たりし時汝は何處にありしや(約  
百卅八の四)神が世界を整へし時汝は神と共にありしか、誰か主の靈を  
導き、議士と爲りて教へしや(以賽亞四十の十三)汝等地質學者は地層の

構造に於て主の智を悟れりとして自負し而して神聖なる創世記に逆ふ  
て之を確證せんとす、汝等が地層の死文字無魂の土に信を置くこと、神  
を視たる大預言者モイセイの天啓的言を信するよりも深し。

○汝は吾人が聖人に祈る時、彼等が如何にして天より吾人の聲を聴く  
かを疑ふ。夫の太陽の光線は如何にして天より普く吾人を射如何にし  
て全地を照らすか、聖人の神靈界に於けるは猶物質界に於ける太陽の  
光線の如し、神は永遠施生的の太陽として聖人は此の有智なる太陽の  
光線なり、主の目が常に此地と地上の生物とを鑒みる如く、聖人の目も  
亦造物主の照管的眼光の向ふ所と、彼等の寶の在る所、其體其事業、神聖  
の場所、彼等と委ねられたる人々、向はざるを得ず、蓋し汝等の財の在

る所<sup>ところ</sup>汝等<sup>なんぢら</sup>の心<sup>こころ</sup>も亦<sup>また</sup>あるべければなり(馬太三の廿一)心<sup>こころ</sup>が事物<sup>じぶつ</sup>を(就中<sup>すなわち</sup>神靈界<sup>しんれいがい</sup>の事物<sup>じぶつ</sup>)見るの如何<sup>いか</sup>も速<sup>すみやか</sup>に遠<sup>とほ</sup>く且<sup>かつ</sup>つ明<sup>あき</sup>かなるかは汝<sup>なんぢ</sup>の知<sup>し</sup>る所<sup>ところ</sup>ならん汝<sup>なんぢ</sup>は諸般<sup>しよはん</sup>の意識<sup>いしぎ</sup>就中<sup>すなわち</sup>神靈的意識<sup>しんれいていしぎ</sup>に於<sup>お</sup>て之<sup>これ</sup>を認<sup>み</sup>めよ茲<sup>こゝ</sup>よては只<sup>ただ</sup>信<sup>しん</sup>心<sup>こころ</sup>よて見<sup>み</sup>ることのみよて知<sup>ち</sup>得<sup>とく</sup>せらるゝもの甚<sup>はなは</sup>だ多<sup>おほ</sup>し心<sup>こころ</sup>は人<sup>ひと</sup>の本質<sup>ほんしつ</sup>の目<sup>め</sup>よして此<sup>この</sup>目<sup>め</sup>清<sup>き</sup>ければ清<sup>き</sup>きはと其<sup>その</sup>見<sup>み</sup>ること最<sup>もつと</sup>も迅速<sup>じんそく</sup>よ最<sup>もつと</sup>も遠<sup>とほ</sup>く最<sup>もつと</sup>も明<sup>あき</sup>かなり然<sup>しか</sup>るに神<sup>かみ</sup>の聖人<sup>せいじん</sup>よ至<sup>いた</sup>りては此<sup>この</sup>靈魂<sup>れいこん</sup>の目<sup>め</sup>は生前<sup>せいぜん</sup>已<sup>ま</sup>に人間<sup>げん</sup>の能<sup>あた</sup>うだけの清<sup>せい</sup>潔<sup>けつ</sup>の程度<sup>ていど</sup>に達<sup>た</sup>ち死<sup>し</sup>後<sup>ご</sup>神<sup>かみ</sup>と体<sup>たい</sup>合<sup>あ</sup>するよ及<sup>およ</sup>んで神<sup>かみ</sup>の恩<sup>おん</sup>寵<sup>ちゆう</sup>よて益<sup>えき</sup>々<sup>々</sup>明<sup>めい</sup>々<sup>々</sup>白<sup>はく</sup>々<sup>々</sup>と爲<sup>な</sup>り己<sup>おのれ</sup>の視力<sup>しりき</sup>の達<sup>た</sup>つ際<sup>さい</sup>限<sup>げん</sup>よ於<sup>お</sup>て益<sup>えき</sup>々<sup>々</sup>廣<sup>ひろ</sup>くなるなり故<sup>ゆゑ</sup>よ聖人<sup>せいじん</sup>の見<sup>み</sup>る所<sup>ところ</sup>甚<sup>はなは</sup>だ明<sup>めい</sup>白<sup>はく</sup>よ廣<sup>ひろ</sup>くして且<sup>かつ</sup>つ遠<sup>とほ</sup>し彼等<sup>かれら</sup>は吾人<sup>われ</sup>の心<sup>しん</sup>靈<sup>れい</sup>上<sup>じやう</sup>の需<sup>じゆ</sup>要<sup>よう</sup>を洞<sup>どう</sup>見<sup>けん</sup>し凡<sup>たゞ</sup>を誠<sup>せい</sup>心<sup>しん</sup>彼等<sup>かれら</sup>を顧<sup>こ</sup>ふ者<sup>もの</sup>を視<sup>み</sup>且<sup>かつ</sup>つ聽<sup>き</sup>くなり即<sup>すなは</sup>ち

有<sup>あ</sup>智<sup>ち</sup>の目<sup>め</sup>を直<sup>ちよく</sup>接<sup>せつ</sup>彼等<sup>かれら</sup>よ向<sup>む</sup>けて一<sup>いつ</sup>點<sup>てん</sup>の曇<sup>曇</sup>りなく且<sup>かつ</sup>つ彼等<sup>かれら</sup>よ向<sup>む</sup>ふと疑<sup>うたが</sup>ひと薄<sup>はく</sup>信<sup>しん</sup>とよて其<sup>その</sup>目<sup>め</sup>を味<sup>あじ</sup>まさず祈<sup>いの</sup>禱<sup>たう</sup>する者<sup>もの</sup>の心<sup>こころ</sup>の目<sup>め</sup>が其<sup>その</sup>顧<sup>こ</sup>ふ所<sup>ところ</sup>の者<sup>もの</sup>の目<sup>め</sup>と相<sup>あ</sup>合<sup>あ</sup>する時<sup>とき</sup>なり是<sup>こゝ</sup>れ實<sup>じつ</sup>に奥<sup>おく</sup>妙<sup>めう</sup>なる視<sup>し</sup>覺<sup>かく</sup>なり經<sup>けい</sup>驗<sup>げん</sup>ある者<sup>もの</sup>は能<sup>よ</sup>く之<sup>これ</sup>を知る故<sup>ゆゑ</sup>よ聖人<sup>せいじん</sup>と交<sup>かう</sup>通<sup>つう</sup>する何<sup>なん</sup>ぞ夫<sup>そ</sup>れ易<sup>やす</sup>きや只<sup>ただ</sup>心<sup>こころ</sup>の目<sup>め</sup>を清<sup>き</sup>め毅<sup>ぎ</sup>然<sup>ぜん</sup>之<sup>これ</sup>を或<sup>ある</sup>聖人<sup>せいじん</sup>よ向<sup>む</sup>けて要<sup>よう</sup>する所<sup>ところ</sup>のものを求<sup>もと</sup>むれば則<sup>すなは</sup>ち成<sup>な</sup>らん而<sup>しか</sup>して主<sup>しゆ</sup>の此<sup>この</sup>視<sup>し</sup>覺<sup>かく</sup>よ對<sup>たい</sup>する關<sup>くわん</sup>係<sup>けい</sup>果<sup>はた</sup>して如何<sup>いかん</sup>彼<sup>かれ</sup>は全<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>目<sup>め</sup>なり全<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>光<sup>ひかり</sup>なり全<sup>ぜん</sup>然<sup>ぜん</sup>知<sup>ち</sup>なり彼<sup>かれ</sup>は常<sup>つね</sup>よ天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>よ充<sup>じゆ</sup>滿<sup>まん</sup>し到<sup>いた</sup>る處<sup>ところ</sup>よ於<sup>お</sup>て萬<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>を見<sup>み</sup>る「主<sup>しゆ</sup>の目<sup>め</sup>は何<sup>いづ</sup>處<sup>ところ</sup>よありても惡<sup>あく</sup>人<sup>にん</sup>と善<sup>ぜん</sup>人<sup>にん</sup>とを鑒<sup>かん</sup>みるなり」箴<sup>しん</sup>言<sup>ごん</sup>十五<sup>じふご</sup>の三<sup>さん</sup>)

○神<sup>しん</sup>靈<sup>れい</sup>界<sup>がい</sup>就中<sup>すなわち</sup>萬<sup>ばん</sup>事<sup>じ</sup>を照<sup>て</sup>し萬<sup>ばん</sup>物<sup>ぶつ</sup>よ生<sup>せい</sup>活<sup>かつ</sup>を施<sup>ほ</sup>すの靈<sup>れい</sup>妙<sup>めう</sup>的<sup>てき</sup>太<sup>たい</sup>陽<sup>やう</sup>に對<sup>たい</sup>する信<sup>しん</sup>は無<sup>む</sup>垢<sup>こう</sup>の良<sup>りやう</sup>心<sup>しん</sup>を有<sup>いう</sup>する靈<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>をして喜<sup>き</sup>悅<sup>えつ</sup>爽<sup>さう</sup>快<sup>くわい</sup>を感<sup>かん</sup>せしむ信<sup>しん</sup>は心<sup>こころ</sup>よて視<sup>み</sup>

るの程度は達せざるべからず即ち靈魂は感情の上に卓立し己の肉體の暗昧なる本性の上は超然として自ら一可及的心理の清き目を以て  
— 神靈界は透徹せざるべからず此の如くなれば靈魂は甚だ爽快にしてその眞誠の生命安慰及び喜悅は此に存す是れ實驗なり。

○想像及び思想は是れ或事物を作成し又は生ずる心若くは靈魂の視覺なり故に彼は神速忽如として神靈的性質を帯ぶ是れ靈魂が或事物に就て作るの撮影畫として理性(判斷力)は此撮影畫に就て寫生するの畫工なり。

○主若し慈悲恒忍ならずんば彼れ豈に吾人より斯かる至大の侮辱を忍び汝の爲め藉身して苦を受け死すべけんや又焉ぞ夫の神使の視て

戰慄する己の至淨の體血を以て汝に與へんや又焉ぞ斯く幾度か限りなく汝を罪と神靈的の死とより救はんや彼れ恐らくは云ひしならん汝若し惡に溺るゝこと此の如くならば苦めよ我は己に屢々汝を救ひたれば今後又汝を救はずと然るに彼は今終生吾人より數限りなき侮辱を忍び受け猶且吾人の翻然悔悟するを待つ須らく彼れの愛と恒忍とを讚榮せよ汝試に想へ彼なく彼れの救贖なくんば果して如何なりしかを恐懼戰慄實に我が靈に盈つ痛悔せざるの罪人は遂に震怒の日及び神の義鞫を顯はすの日よ於て實地神の怒りを蒙るなり(羅馬二の五)

○女宰生神女に祈禱するに當りては祈禱するに先だち汝が慈悲を蒙

らずして彼より去ることなきを確信せよ。彼に對して斯く思惟し斯く信ずるは當然なり。彼は至慈至仁なる神言の大慈大悲なる母としてその測るべからざるはと偉大無量の慈憐は世々ハリストスの諸教會之を宣揚す。彼は實に「オディギトリヤ規程」言ふ如く慈憐矜恤の淵なり。故に祈禱に於て此くの如き自信なくして彼に近づくは無知且つ無禮にして夫の祈禱に於て神は近づきつゝ其の求むる所のものを得んことを信せざれば神の仁慈を侮辱するに當る如く疑を懐く。於ては恐らく彼(生神女)の仁慈を侮辱せん。此は高貴の富人あり其の慈善深きことは人皆之を知り且つ既に幾多の事實にて其慈善の行爲を證明したらんは之が哀を請ふに當りて如何の意向を以てするか。彼より其の請

ふ所のものを得んことを充分に確信して求むるは通例なり。祈禱に於ても亦斯く狐疑躊躇すべからず。  
 ○母が小兒に歩むことを教ふる如く、主は吾人は彼を活信することを教ふ。母は先づ小兒をして立たしめ之を手放して自ら去ること數歩而して後小兒に來れよと命ず。小兒は母に手放されて泣きつゝ其許に往かんと欲するも歩むを恐れ強て往かんとして歩を動かせば乃ち倒る主が「ハリストスティアン」よその歩行(信仰)は神靈的の途なり。たる彼に對するの信を教ふるも亦猶是くの如し。吾人の信仰の弱くして幼稚なること恰も歩行を教へらるゝ小兒の如し。主は之に己の佑助を絶ちて魔鬼若くは種々の災難憂悲に付し而して後之を脱するに就ての佑助極め

て必要なる時、當り吾人が救贖の必要を感せざる時は彼も就かんとする意なきなり、恰も彼を見、必ず彼を見よ、彼に就て、佑助を求むべきことを命ずるもの、如し、ハリスティアンは力めて爾かせんと欲し、心裡の目を啓き、小兒の足を運ぶ如く、之よて主を見んと急るも、神を睹るに慣れざる心は、之を敢てするを懼れ、躓きて倒る、是に於て敵と其有罪なる天性はその啓きかゝりたる心の目を蔽ひ、之を主より遠ざけ、彼遂に近づくと能はず、而も主は還きよ在りて、之を己れに引付け、恰も手に抱かんと欲するもの、如し、汝只信仰よて彼も近づけよ、汝は全く信仰の心の目にて彼を見んと努め、心裡の視覚よて彼に投ずれば、彼は恰も手も抱き取るが如く、自ら佑助の手を垂れて、敵を逐ふ、是に於て、ハリス

ティアンは親しく救主の手中に抱かれたるが如き感を爲す、主よ爾の仁慈と睿智は、頌讚すべきかな、魔鬼の強迫及び諸般の憂悲よ、遭遇する時、よ於ても、斯く心よて、恰も目前に在るもの、如く、明々地に救主の鴻仁なる腹を見、仁慈矜恤の無盡藏なる寶庫として、此腹に目を注ぎ、赤心彼に祈りて、此の仁慈と心靈的佑助の、涸れざる泉より、吾人よも、分け注がんことを求むべし、然らば、忽ち其の求むる所のものを得ん、要は信仰即ち心にて、主を見、至仁なる彼れより、万事を得ん、どの希望を懐くよ、在り、是れ眞實なり、經驗よ由りて、知る所なり、主は又之を以て、人が神に依らざれば、己の徳義力の極めて、微弱なるを悟り、自ら痛歎して、常に祈禱の心地を保たんことを諭すなり。

○「ハリステイア」ニハ決して心も何人も對しても惡意を挿むべき謂れなし、惡意は即ち惡なるを以て、惡魔の作用なり、「ハリステイア」ニハ心も只愛のみを懐かざるべからず、而して愛は惡事を思惟せざるが故、他人に對して如何なる惡事をも思惟すべからず、例へば我は現然たる理由なくして彼は兇惡なり、傲慢なり、杯と思惟し、又は我れ彼を尊敬せば、彼れ高慢し、侮辱を恕すれば、彼れ復た我を侮蔑嘲笑せん、杯と付度すべからず、惡をして如何なる姿にても我が衷に巢窟を作らしめざることを必要なり、惡は其姿を極めて種々雜多にするを例とす。

○領聖後の心の平和と生命の緯々とは身體に關する總ての恩賜、勝さる主イエススハリストスの價すべからざる至大の賜なり、心の平和

なくんば、心中懊惱煩悶して如何なる幸福をも、その物質的たると精神的たるを問はず、利用する能はず、此の如くなれば、其生命の中心たる心若くは内部の人は、壓死せらるゝ、等しきを以て、眞と善と美の感情より出づる樂みは彼の爲め、存在せざるなり。

○赤心より出づるの信、由り己の靈魂にて神と體合せ、よ然らば、万事爲し能はざる所のものなからん、睡眠せざる無形の勁敵、汝と闘はんか、汝之に勝たん、有形の外敵と争はんか、汝又勝たん、情慾汝を噛み裂かんか、汝能く之を制せん、憂悲汝を壓迫せんか、汝能く之を排せん、精神沮喪せんか、能く勇氣を回復せん、信を以て勝つ能はざる所のものなく、信を以てせば、天國をも受けん、信は此世の生命の最大幸福なり、彼は人を神

と合せしめ神に於て之を優勝者となす、主よ合ふ者は主と一霊と爲るなり、哥林多前書六の十七

○主は吾人の寸功なきよ己の仁慈に由りて吾人をして太陽及び太陽の光を見て自ら樂むを得せしめ又己の近づくべからざる光よて樂ましむ汝は太陽の光を以て其聘質と爲すべしされど就中在天の父の聖なる光榮の穩かなる光一吾等よ賜はりたる彼れの獨生子及び吾等の心に授かりたる愛の聖神を以て其聘質と爲すべし。

○神の世界を見るに當りて我が目に觸るゝ所のもの何ぞ動物界よ於て、獸畜の間昆蟲の間禽鳥の間魚類の間よ於て到る所生命の非常よ悠悠として爽快なるを見る今試よ問はん人間就中敬虔よ熱心なる人々

の生命の狹穿よして其途の悲哀的なるは何ぞやと主は到る處よ生命と満足と喜悅とを廣く限らし造物は人間を除くの外皆満足を以て生命を以て怡々たる喜悅を以て造物主を頌讚す獨り我よ於てのみ万有の生活と齟齬するものあるは何ぞ我豈よ同一の造物主の受造物よ非ざるか其理知り易きのみ吾人の生命は吾人或は自ら罪よて之を害し或は無形體の敵よ害せらる就中此敵に害せらるゝこと多く敬虔の業を修むる者よ對して殊よ然りとす眞誠の「ハリストイア」たる人間の生命は前途よ在り來世よ在り彼れの爲め總ての喜悅と完全圓滿の幸福は彼處よ於て開かるゝなり此世よ於ては人間は追放者よして罰の下よ在り此よ於ては吼る獅子の如く徧行て吞むべきものを尋ぬる彼

得前書五の八古來の敵は姑く措て言はず時として罪の爲め万有悉く人に敵對することありされば我は何故世界到る處よ喜悅と満足とありて我よは屢々喜悅なきやのことよ就て敢て心を動かさず我は憮然として神の造物の怡々且つ悠々乎たるを眺む罪の爲めの劊手我よ在り此劊手は常よ我と共よして我を鞭撻す然れども我の爲にも喜悅の時至らん只此世に於てせず彼の世に於てするなり。

○我れ神の世界を眺むれば到る處万有の賜よ於て神の非常よ潤澤なるを見る地の面は恰も是れ博愛慈善なる主人か豊に種々のものを配列したる珍膳の如く水の底よも亦人を飽かしむるもの多々あり禽獸は如何是亦人よ衣食を給すること何ぞ夫れ潤澤なるや主の恩惠の潤

澤なる實よ限りなし視よ地が夏秋給する所のものよ足らざる所あるかハリスティアニシたる者就中司祭は須らく主の潤澤よ倣ひ汝の食卓を主の珍膳の如く公開せよ貪婪は主の敵なり。

○地よ根を植付けられたるの樹は成長して實を結ぶ人の靈魂も心靈的の根たる信と愛とよて神よ植付けらるゝ時は心靈的よ成長して神よ嘉せらるゝ諸徳の果を結び靈魂は之れよて生さ且來世よまで生活せん根と共よ地より採取られたるの木は根よ由りて地より受くる所の生命を絶たる神よ對する信と愛とを失ひ己の生命の籠れる神よ居らざる人間の靈魂も亦猶是の如くよして精神的よ死す靈魂よ取りて神の須臾も欠くへからざること猶草木に取りて土地の必要なる如し



よ於て心よて或る眞理を見ること(觀念)が知識上の意識よ先だつを認めざるか意識の順序を云へば心は一度よ不分離的よ瞬間に見るなり而して此心よて見たる單純の作用は智よ傳へられ智よ於て分解せられ區分茲よ立ちて即ち心よて見たることは智よ於て分解せらるゝなり觀念は心よ屬して智よ屬せず内部の人よ屬するものよして外部の人よ屬するものよ非ず故よ萬般の意識よ於て心の目を明かよすること最も緊要なり就中信仰の眞理と徳義の原則とを識ることよ就て緊要なり。

○未來の生命とは今漸々清めつゝある心の純潔無垢と爲るの謂なり此心は罪と魔鬼の呼吸よて屢々閉ちられ昧まされ又時として神の恩

寵の作用よて明かよなりて神を視祈禱及び領聖の機密よて誠心彼と体合することあり。

○祭日を如何よ祝すべきか吾人は或は事件を祝し(即ち事件の偉大なること其目的其の信者よ對する結果よ意を注ぐ)或は人物を祭る例へば主神の母天使聖人等是なり(即ち其人物の神及び人類よ對する關係總體彼れが神の教會よ與へたる好影響よ意を注ぐ)吾人は須らく其事件若くは人物の歴史よ意を注ぎ心よて其事件若くは人物よ接近し之を己れよ吸收せざる可らず然らざれば祭日は不完全と爲り神に嘉みせられざる者と爲らん祭日は須らく吾人の生活上に影響を及ぼし吾人の未來の幸福よ對する(心の)信仰を活かし且つ暖め以て敬虔の美風

○日々情慾と魔鬼に役使せられざらんが爲め、目的を立て、常に之に意を注ぎ主の名よて諸般の妨碍を排しつゝ之を趨走すべし。目的とは何ぞ。創世以來信者よ備へられたる天國光榮の神殿是なり。然れども目的は一定の方法よて遂げ得らるゝ如く此方法をも握有せざるべからず其方法は何ぞ。信と望と愛よして就中愛是なり。汝は信せよ望めよ愛せよ就中萬障を排して万事よ超えて神を愛し又總ての隣を己の如く愛せよ。されど汝は心中よ此の人の靈魂の貴重無比の寶を保有するの力なきを以て屢々愛の神よ額突きて求めよ尋ねよ叩けよ。さらば必ず得ん必ず遇はん必ず啓かれん(馬太七の七八參看)之を約せし者確かなり歩むも坐するも寝ぬるも談話するも將た業を營むも常よ心よて信

と愛の賜はらんことを祈るべし。汝は未だ當然よ一熱心を以て不撓不屈の精神を以て一求めず之を得んとする確乎たる望を有せざりき。今より「是れ乃ち初めなり」と言へ。

○神に向ふの途よ於て惡魔の構ふる妨碍一疑惑不信心中の憎惡時として無論敬愛すべき人よ對しての憎惡并に其他の慾一よ遇ふも心を動かすことなく此等のものは皆敵の煙及び臭氣よして主イエススハリストス一たび之を排せば直よ雲散霧消するものと知れ。

○少年を教育するよ當りて最も意を注ぐべきものは何ぞ之をして「心の目を明かすする」(以弗所一の十八)を得せしめんこと是れなり。汝豈よ吾人の心が吾人の生活上の第一の働手よして吾人の殆ど總ての意識

よ於て心よて或る眞理を見ること(觀念)が知識上の意識よ先だつを認めざるか意識の順序を云へば心は一度よ不分離的よ瞬間に見るなり而して此心よて見たる單純の作用は智よ傳へられ智よ於て分解せられ區分茲よ立ちて即ち心よて見たることは智よ於て分解せらるゝなり觀念は心よ屬して智よ屬せず、内部の人よ屬するものよして外部の人よ屬するものよ非ず故よ萬般の意識よ於て心の目を明かよすること最も緊要なり就中信仰の眞理と徳義の原則とを識ることよ就て緊要なり。

○未來の生命とは今漸々清めつゝある心の純潔無垢と爲るの謂なり此心は罪と魔鬼の呼吸よて屢々閉ちられ昧まされ又時として神の恩

寵の作用よて明かよなりて神を視祈禱及び領聖の機密よて誠心彼と体合することあり。

○祭日を如何よ祝すべきか吾人は或は事件を祝し(即ち事件の偉大なること其目的其の信者よ對する結果よ意を注ぐ)或は人物を祭る例へば主神の母天使聖人等是なり(即ち其人物の神及び人類よ對する關係總體彼れが神の教會よ與へたる好影響よ意を注ぐ)吾人は須らく其事件若くは人物の歴史よ意を注ぎ心よて其事件若くは人物よ接近し之を己れよ吸收せざる可らず然らざれば祭日は不完全と爲り神に嘉みせられざる者と爲らん祭日は須らく吾人の生活上に影響を及ぼし吾人の未來の幸福よ對する(心)の信仰を活かし且つ暖め以て敬虔の美風

を養成せざるべからず。然るに祭日は動もすれば罪よて過され、夫の薄  
信冷淡よして往々其の祭る所の人物若くは事件よ由りて賜はりたる  
神の大恩恵を全く感せざる心よて愚かよ迎へらるゝなり。

○汝の靈魂よ在る罪豈よ少々ならんや、されど「竈よ在るもの悉く之を  
板間よ掃き出す母れ」是れ露國の俚諺よして悉く意中を暴露する母れ  
どの意なり、其罪は獨り汝の隱微を監みる主の知る所たるよ止め人々  
よは己の諸の不淨を示さず、汝の裡に伏在する惡の氣息をして彼等よ  
傳染せしめず、須らく竈を閉ぢ惡の煙をして汝の衷よ死せしめよ、汝の  
靈魂の惡よ盈ち、汝の生命の地獄よ近づける憂悲をば神よ告げ、人々よ  
は無邪氣なる愛らしき面を示せ、汝の愚さは何ぞ之を彼等に示すの要

あらん。若し夫れ己の病を神父若くは己の友よ告白し、彼等の忠告よ由  
りて豁然悔悟し、其教訓を受けて自ら制するは則ち可なり。

○汝は仰いで天を觀つゝ、其高さ所より曾て初致命者ステファン及びサ  
ウルよ現れたるの主イエスを想見し、彼に救贖を祈るべし。主の顯現  
とは彼れが只彼の時のみ恰も天を開き、その開かれたる天よりして彼  
等を見たりとの謂よ非ず、乃ち彼が常よ天より我等衆人を見、吾人の悉  
くの言行、意思、希望を見ること、猶汝が主を見んとて目を舉げて天を見  
彼れより奇々妙々偉大の佑助を得、多くの實驗よて之を確かめたるが  
如きことを言ふなり、彼れが前記の場合よ於て表顯し、天よ己を現せり  
とは此の謂よ外ならず。

○罪を犯すは大なる不利益にして、且愚の至なり、蓋し罪人は自ら己を  
 輕蔑し人間との交際を避け、獨り同臭味の者と交際す、是れ其内心の狹  
 隘と蟲とは彼をしてその生活の性質より由りて之と其趣を異にする端  
 正潔白の社會と交るを難からしむるに依るなり、世界は至聖公義なる  
 神の工なるを以て、罪人は此の廣き世界に於て肩身甚だ狭し、神の法、愛  
 と平和との法に從はざる罪人は神の造物の屑にして世に容るべから  
 ざるものなり、是れ彼れの肩身狭き所以なり、神と彼れ自己の良心とは  
 彼れを窘蹙し、且神の造物は一として彼を窘蹙せざるなし。

○疑惑、不信、誹謗の思想起るときは、於て苦痛を感じるものは何ぞ、其の  
 疑はるゝ所のもの、其の信せられざる所のもの、其の誹謗せらるゝ所の

ものか、將自ら疑ひ、自ら信せず、自ら誹謗する其人なるか、無論後者なり  
 彼等は懼れなき處、聖詠十三の五に懼れを懷き、己の疑惑を不信と誹謗  
 とよて自ら苦しむも、彼等の苦痛の本因たるものは依然確乎として動  
 かず、遂に彼等をして其心を安んせしめんがため、己に關する思想を變  
 更せしめて以て之に勝を制し、彼等が己に關する以前の謬想を悔悟し  
 眞誠好箇の思想を懷くよ、非ざれば、彼等をして安心するを得せしめず  
 故に祈禱又は其他の時に於て疑惑、不信、誹謗及び其他之に類する思想  
 起るに際して心を動かし、其意を擾乱するが如きは愚の至なり、況んや  
 落膽喪神するに於てをや、是れ撒但の誘なり。

○憎悪若しくは其他の慾心、棲む時は惡の必然の法より、必ず外

部に溢れ出でんとす。故に悪人若しくは怒れる人のことを指して、彼れは某に對して嫉を散じたり。或は某に對して怒を霽したりと云ふを例とす。惡の禍たる單に心中に止まらず、其外に出で、蔓延せんとするあり。惡の本因、其者の至大にして、其跋扈する區域の甚だ廣きこと之よりて知るべし。舉世惡に服す(約翰第一書五の十九)天の蒸氣若しくは瓦斯が密所に壓塞せられて、沸々外部に突出せんとする如く、憎惡の神の氣息たる慾も人の心は充盈するに及んで、一人の人より他の人々へ溢流し、己の臭氣をして他人の靈魂に傳染せしめんとす。

○神既に仁慈の最大の賜なる存在を吾人に賜ひ、而して吾人が彼れより離れて生より死に墮落するに及び、彼れ我等を更生し、我等を生命よ

導かんが爲己の子を賜へりとせんは、吾人が祈禱に於て求むる自餘の幸福の如き甚だ微々たるものにして、若し其求むる所のもの果して吾人のため必要なるに於ては、誠心信仰より出づる言を一たび發せば、彼れ之を吾人に賜ふこと必然なり。吾人が祈禱に於て之を神より受くるや否やを疑ふに於ては、其罪豈に推諉するを得んや。救主明言して曰く、「求めよさらば汝等も與へられん」(馬太七の七)。

○此の虚無の世、奸惡有罪の世に於ては、絶えず屢次冥々裡に靈魂と肉体とを蝕蝕ひ、銹壞り無形の盜これを穿ちて、靈魂の財(馬太六の十九)義と和と聖神よ由るの歡樂と(羅馬十四の十七)を竊ひ、此の絶間なき罪の腐敗と此の無形の盜とより免るべき確實の方法は何ぞ、他なし、痛悔及

び信仰しんかうは基もとづくの祈いのち禱たう是これなり此この祈いのち禱たうは誤ご惑ごつ的てきの慾よくに溺おぼれて腐ふ敗ぱいする吾人ごじんの靈れい魂こんを蘇よみがへらし無む形けいの盜ぬすびとを驅く逐しやくす祈いのち禱たうは彼等かれらを追おふの鞭むちにして吾人ごじんの爲ために能のり力りきと生せい命めいと救きう贖しやくとの泉いづみなり之これに就ついて須すらく主しよを頌しょう讚ざんすべし祈いのち禱たうは吾人ごじんを罪つみより預よ防ぼうし罪つみより救すくふ信しん仰かうより出いづるの祈いのち禱たうを以もつて生せい活かつする時ときは凌しのぎ易やすし开そは祈いのち禱たうの際さいは求もとむる者ものに總まての幸かち福ふくを與あたふことを約やくしたるの主しよと偕ともすればなり曰いはく「求もとめよさらば爾等なんぢらも與あたへられん尋たづねよさらば遇あはん叩たたけよさらば啓ひらかれん蓋はたし凡おほそ求もとむる者ものは得え尋たづぬる者ものは遇あひ叩たたく者ものには啓ひらかるべし馬うま太た七しちの七八しちと主しよ爾等なんぢらの至し誠せいなる言ことばは頌しょう讚ざんすべきかな主しよ我われ不ふ當たうの者ものに由よりて爾等なんぢらも求もとむる總まての人ひとに諸種しよしゆの幸かち福ふく彼等かれらが赤心せきしん求もとむる所ところのものを

與あたへよ。アミン。必かならず成ならん。  
 ○汝若なんぢらし汝なんぢらの祈いのち禱たうに對たいして主しよより速すみに誠實せいじつの信しんを得えんと欲ほつせば人々ひとびとに對たいして言げん行かう共ともに誠心せいしん誠意せいいを以もつてし決けつして之これに對たいして貳心ふたこころを懷いだく勿なれ汝若なんぢらし人ひとに對たいするに赤誠せきせいを以もつてし信義しんぎを以もつてせば主しよは汝なんぢらに賜たまふよ神かみに對たいする時ときに於おいても赤誠せきせいと誠實せいじつとの信しん仰かうを以もつてすべし人ひとに對たいして誠實せいじつならざる者ものは主しよも祈いのち禱たうに於おいて容ゆる易いに之これを受けず之これをして彼等かれらが人ひとに對たいして誠實せいじつならざるよ由より神かみに對たいしても全まく誠實せいじつならざるを悟さとらしめんとす。  
 ○汝なんぢら慾よくに溺おぼれたる人ひとに必要ひつ要ようなるものは何なんぞ汝なんぢら曰いはふ生せい命めいなりと汝なんぢらの日ひ夜や醒せい醒せい奔ほん足そくするは何なんの爲ためぞ又また曰いはふ生せい命めいの爲ためなりとされど汝なんぢらの生せい活かつは

果して眞正の生命なるか。知識と實驗とは人をして然らずと云はざるを得ざらしむ。然らば則ち汝の生命たるべきものは果して何ぞ。知識と實驗とは我に告げて信と望と愛なりといふ。吾人の靈魂の生命は神及び神に對するの活信、熱愛並に我と同等なる人々を對する愛にして是等のものは我が心の安慰、快潤にして之なくんば我は罪の殉死者となり、怒の僕となり、奴隷となり、我が生命は憂悲、懊惱の裡に過ぎ去らん。

○予は此の世に於てもハリストスに於て、ハリストスと偕して安慰す。然らば死後此の世の敵と戦ひて後、彼と俱して曷んぞ永遠の安慰を得ざることを信せざるを得ん。予は此の世に於てもハリストスと偕してせざれば心苦し。然らば曷んぞ彼の世に於て彼と俱してせざらず。彼が己の

顔より全く我を斥けたる時、更は苦痛の甚しきを信せざるを得ん。吾人の靈魂の現狀が未來の狀態を豫象すること、斯くの如し。未來の狀態は内心の現狀の繼續にして、只其程度相異なるのみ。即ち義人の爲は化して永遠の光榮の圓滿となり、罪人の爲は永苦の充實となりんとす。

○祈禱と頌讚とに於て、快味を實驗したるダウソド曰く、我神に近づくを以て善とす。聖詠七十二の廿八と、他の人々も之を確め、我罪人も亦之を確證す。試み思へ、今猶此の世に於て吾人が快と不快との多き有罪の肉体に在る時、に於てすら神に近づくこと幸福にして善しとせんには、彼の天に於て神と体合する時、に於て如何に幸福なるべきよ。此の世に於て神に近づくに由りて感ずる所の幸福は、死後永遠に於て神に近づく



よ由りて感ずる幸福の模なり擔保なり見よ造物主の如何に洪仁鴻慈  
 よして誠實なるを彼は汝をして彼の體合よ由りて生ずる未來の幸  
 福を信せしめんがため汝をして今此の世よ於て汝が誠心彼よ合した  
 る時此の幸福の一端を實驗するを得せしむ然り我が無形の靈魂が今  
 此世よ於てすら實際見えざる神よ於て安慰を得るとせんよは況や肉  
 體を蟬脱したる後よ於てをや彼よ在りて安息すべきは論を俟たず  
 ○靈は強くして有力なり故よ重きものを荷ふこと易やたりされど肉  
 體は軟弱なり故よ同種類のもの之を壓すること易し是を以て神は己  
 の全能の言を以て全世界を荷ふこと有る無きものゝ如く是を以て恩  
 寵を蒙りたる人の靈魂も神の扶助を以てせば己の肉體を制すること

易く且つ他人の肉體をして亦其靈魂よ服従せしむるを得べく(聖人に  
 於て見るが如く)祈禱よ於て其文句を悉く靈化して之を解すること易  
 し只夫れ肉體的の人は歩每よ己の肉體よ服従し自ら肉身たるを以て  
 祈禱の文句を靈化する能はず不淨よして肉よ溺れたる己の靈を以て  
 その清淨神聖なる精神を貫く能はずして其文句よ惱む。  
 ○人は常よ罪よ由りて亡ぶ日々須臾も離るべからざるの教主之よ必  
 要なり此の教主は誰ぞイイスス、ハリストス神の子是れなり汝は只内  
 心救贖を洞見するの活信を以て彼よ籲べよ彼必ず汝を救はん彼は斯  
 く奇々妙々よ勝て數ふべからざるほど多く我を救へり而して之を救  
 めの明々白々たること例へば猶救脱者の現はよ獄中よ來りて囚徒を

救ひ出すが如し、司祭たる者は信仰の力を實驗し、又祈禱の妙味と罪の赦免とを實驗し、又その祈禱の無効なりし時と靈魂の憂悲と遭遇したる時の事情と恩寵の慰藉とを實驗し、信者のため神に祈禱する時、於て彼等も爾が常も我れ不當の者の賜ふが如き幸福を賜へよと云ひ、万事己の實驗を徴して求むること必要なり。

○身分相等しからざる二人のことを指して某が某の心は近しと云ふことあり、凡そ高貴の人の保護を得、其心事を打ち明けられたる者は、其心中を知りて互に其心よて之と相近し、神と誠心之よ事ふる者の間、於ける關係も亦猶此くの如し、神は常も此の人々の心は近く、彼等も亦神の心は近し、ハリステイアニンの祈禱の際、於ても亦須く斯くの如

くよし、吾人は祈禱しつゝ必ず心よて神は近づくかざるべからず、吾人の人々も對する赤心的の善き關係は之を神も移さるべからず。

○汝は常も快絶なるイエスの面前に歩むを記憶せよ、汝は屢々己に向つて言ふべし、我は我が爲よ十字架よ釘せられたる我が愛、イエスのことを喜ばしむるが如く、生活せんことを欲す、就中我は我が心よ万人を包羅し、万民の救贖を渴望し、喜ぶ者と與ふ喜び、悲しむ者と同じく、悲むの聖なる愛を以て我が生活の伴侶と爲さんと、是れ最も我が慰藉者たるハリステスを慰むるものなり。

○父母及び教育者よ、汝等深く注意し己の子をして汝等の前も放縱の振舞を爲さしむる勿れ、然らざれば汝等の子女は忽ちよして汝等の愛

の價を忘れ、其心を惡く感染し、心中の神聖誠實にして熱切なる愛を忘れ、成人するに及んで幼時父母の寵愛その度過ぎ、其放縱を寛容せられたるを痛嘆するに至らん。放縱は心中腐敗の芽心の鏽、愛の蟲、惡の種子主の憎む所なり。

○聖堂に於て殊更罪を清むるの機密行はる汝の靈魂の汚穢の洗滌せらるゝ所、汝が神と和するの所、汝が靈魂の眞誠の生命を受くる所、對して宜しく敬肅を盡すべし。主が此處に於て我が罪を清め給ひしこと幾回ぞ、我れ之に清められざれば神の賜—生命の至大の賜、平和及び喜悅の賜、物質的の幸福—を享受して樂しむを得ざりしならん。イエス神の子よ、爾は光榮を歸す。爾は我儕の罪の挽回の祭物なり。第二我儕の

爲のみならず普く世の爲の挽回の祭物なり。約翰第一書二の二

○物は變化の甚しきものはあらじ、奇々與妙の變化、例へば火の露と化し、水の血と變じ、又水の化して葡萄酒となり、杖の化して蛇と爲るが如きは、姑く措て言はざるも、夫の物は天然の神の法に循て其形を變ずること幾百万なるを知らず、人間すら時として物の形を變ずること幾千種なることあり。然らば万物を創造せし造物主に就きて何と云はん。夫れ變化は物体の性質なり。只主は有智の靈に對して之を爲さず。且つ爾かするを欲せず。不變不易は靈の性質にして、只善を修練する事は受造物たる有智の靈の所爲なり。抑も靈の万物に長たるは靈が物を幾千種も變化するに在り。例へば看よ植物界に於て此の靈が如何に

物を變化し植物の如何に限りなく其形を異にするかをされど是れ皆  
 惟一の土より出づるなり太陽の光は一空氣は一水は一土も亦一なり  
 翻て動物の体を見れば何ぞ夫れ種々雑多なるや夫れ是くの如く變化  
 は物の性質なり世界が種々の形狀に於て造られたるもの亦實に之が  
 ためなり獨り永遠に不變不易の神全能の造物主に光榮を歸す若し物  
 体にして不變不易に非ざりせば神は全能ならざりしならん靈性頌美  
 すべき哉彼は須く常に物質性を左右すべし汝は宜しく善に對して不  
 變不動なる忍耐力を賜はらんことを神に請ふべし。

○吾人は何故人の侮辱を記憶し侮辱を加ふる者に對して怒り且つ憤  
 りつゝ最も兇惡最も有害にして絶間なき惡魔の侮辱をば縱令日に其

侮辱を蒙る千回なるにも拘らず甚だ速に之を忘却し而も人より受く  
 る侮辱は其一回なるものも猶且つ心中に之を含みて時として其日の  
 みよて止まざることあるは何ぞや是れ惡魔の瞞着なり惡魔の吾人を  
 欺くや甚だ巧にして自ら吾人を侮辱しつゝ恰も或慾を煽動して吾人  
 の意を迎へんと欲するが如くにして常に吾人の自愛心の下に隠る而  
 も後に至りて彼れ常に吾人を殺害し吾人は淺慮愚昧なる自愛心に溺  
 れたるがため辛き目も遭ふに至るなり他人の吾人に加へたる侮辱は  
 彼れ之を針小棒大にし茲までも彼れ復吾人の自愛心の下に隠れ恰も  
 吾人の幸福の爲に熱心焦慮するも他人が侮辱を以て之を破らんと欲  
 するものゝ如くと思はしむ。

○正反對の二勢力は我に作用しつゝあり、善の力と悪の力、施生の力と死を來すの力は是なり。此の二勢力は靈性的勢力なるを以て兩ながら見えず。善勢力は我の自由且つ誠心の祈禱より常々惡勢力を逐ひ、而して惡勢力は只我が裡に潜伏する惡より由りて有力なるのみ。惡靈の絶間なき煩累を受けざらんが爲常々『イエス神の子よ我を憐めよ』といへるイエスの祈禱を心中に服膺せざるべからず。見えざる者(惡魔)に對しては見えざる神あり、有力者より對して又更々有力なる者あり。

○若し夫れ微弱夢幻として死を免れざる人間すら其天賦の才能を以て斯く多く偉大奇異の事業を企て、一人の言は時として幾百万人の聽従することありとせんは、人間の生命の大本源たる者何事か爲さん

として爲さるる所ある、何者か彼れの言は聽従せざる者ある須く百夫長の言を記憶すべし。彼れ曰く、我人の權下は屬する者なるは我が下亦兵卒ありて此に往けと命すれば往き、彼より來れと命すれば來る、我が僕に之を爲せと曰へば即ち爲す(路加七の八參看)と吾人の蹂躪する夫の微々たる多くの動物すら人間と雖も作ること能はざる驚嘆すべき種々の事物を作るの巧技を賦せられたりとせんには、萬物の造者として萬民は有らゆる技術才能を豊に賦與したる者は何事かを爲さいらん。若し夫れ今日在りて明日爐に投げ入れらるる(馬太六の三十)無心無魂の草木すら彼れの言は由りて斯くも艶麗優美の形と爲り、天下の萬物彼れの言は服従し、彼れの指揮より由りて(五元素の媒介より由りてのみ)

測るべからざるほど限りなく千變萬化すとせんよは誰か是等のことを目撃して彼れ神の全能の證を促すものあらん主よ爾の所爲は奇異なり歩毎よ生命の一時一秒毎よ然るなり天と地とは爾の睿智の光榮爾の仁慈の光榮爾の全能の光榮よ充たさる爾は常に自ら睿智の造物主よして常よ睿智の造物主たるを表示するのみならず爾は爾の造物よ造物の能力を賦與し彼等は爾の言よ循ひ其賦與せられたる能力よ驚嘆すべき有益の物を造るア、爾は何等の威嚴を滿被するか吾人は罪よて己の天性を侮蔑したること此くの如く甚しきも吾人は猶神の目の前よ尊く且つ高尚なり神は吾人の爲己の子を惜まず吾人の救贖の爲彼よ被らしひるよ吾人の肉体を以てし吾人の天性を以てし創

世の時より吾人に永遠の國を備へ本性善良なる神使も亦吾人の悔改の爲に喜ぶよ吾人の爲す所如何吾人は之を知ることすら好まず種々の惡癖世俗の情慾にて益々甚しく己を侮蔑し己の靈魂を滅ぼすのみ此の神の像よ肖せて造られたるの造物たる人間就中斯く高尚の職よ召され斯く尊くせられ斯く神より高恩を被りたるハリストイアニンをみること憐れよして實よ言ふべからざるほど愍然なり。  
 ○強迫よ出づるの祈禱は偽善的敬神の弊を起し深思熟慮を要する業務よ堪へざらしめ人をして萬事よ對して柔弱ならしめ己の職分を行ふことすら其力よ堪へざらしむ凡そ此くの如くよして祈禱する者は宜しく此の理を悟りて己の祈禱を匡正せざるべからず愛よ由り又已

を得ざるよ由りて(強迫的に)神に祈る勿れ—蓋し神は喜びて施を爲す  
者を愛し給へばなり(哥林多後書九の七)

○凡そ敬虔なる「ハリストス・ティアニン」の身体の人工に係らざる聖殿は有  
智の光なる靈魂あり而して其光は有智の太陽なる神より出づる者よ  
して此の神の世界は現は其形を示すこと猶靈魂の身体に於けるが如  
し無形的の太陽なる神の我が靈魂に入り其光輝を發するの状は我之  
を認む何となれば其時は我が心輕快よして温よ且つ皎々然たればな  
り又彼れの我が靈魂を離れて之を暗昧憂苦の裡に放棄するの状も我  
亦之を認む物質界に於て暗の原因と爲るものは太陽の離去若しくは  
雲隠れなるが如く靈界の暗も亦無形の太陽の吾人の靈魂を離れ詛ふ

べき暗の之を蔽ふよ由りて起るなり又物質界に於て太陽の没したる  
後よも其体の無比巨大なるに由りて餘光の常に見ゆる如く靈魂よも  
靈妙なる太陽の去りたる後と雖も彼れの在らざる所なき性質と神の  
許容を得るよ非ざれば全く人の靈魂を暗ますこと能はざる幽暗の君  
の割合は無力なる故とよ由りて餘光尙存す然れども吾人はまた救主  
の言ひし如く全く暗は蔽はれざらんことを慮らざるべからず(約翰十  
二の三十五)

○汝若し病を癒さるゝことあらば左の如き簡短の讃詞を以て主よ感  
謝すべし、曰く、主イエス・ハリストス、無原の父の獨生子、獨り諸の病諸  
の疾を醫す者よ(馬太四の廿三參看)爾は我罪人を憐み我が病をして益

益慕り我が罪よ由りて我を死せしめず我を癒したるに依り我爾よ光榮を歸す主宰よ願はくば今後我よ賜ふよ毅然として爾の旨を行ふの力を以てし以て我が困苦る靈魂を救ひ以て爾と爾が無原の父及び爾と一體なる神とよ今も何時も世々よ光榮を歸するを得せしめ給へアミン。

○清き心とは何ぞ温良なる謙遜なる狡猾ならざる質朴なる信實なる偽りなき猜疑なき悪意なき善良なる貪婪ならざる嫉妬せざる淫慾なき心是なり。

○我が靈魂よ汝須く己の天職を記憶して朽壞取るよ足らざる物の爲よ煩悶する勿れ汝は又他人の天職をも尊敬して朽つべき物の爲よ彼

を辱しめ若しくは嫉む勿れ全力を竭して在天の靈性的のものを愛し地上物質的のものを蔑視せよ汝須らく我が日用の糧を今日我儕よ予へ給へと云へる救主の語を記憶せよ即ち唯今日のみと云へり。ハリス

トス教の妙理實に此語よ含めり又救主が其生活上に於て自ら飲食の爲よ焦慮せざるの例を示し随意の喜捨のみを以て満足したるをも記憶すべし彼曰く我を遣し、者の旨を行ひ其の工を成し畢るはこれ我が糧なり(約翰四の三十四)。

○汝敵を憎むか汝は愚なり何故ぞ他なし敵が汝を窘むる時汝亦自ら内心よて己を窘むればなり試よ思へ敵を憎むを以て己の心を窘むるはこれ最も激しき窘盛よ非ずして何ぞ敵を愛せよ然らば汝は伶俐し



嗚呼汝若し敵を愛し之に善を施すの如何なる勝利よして如何なる幸福なるかを悟了したらんよは……神の子も此くの如く聖三者よ於ける神も此くの如く愛を以て忘恩奸惡の人類よ勝を制し神の聖人も亦此くの如く己の敵を愛し之に善を施して勝を制したり、ハリストスは我儕の尙罪人たる時我儕の爲よ死せり若し我儕敵たりし時よ其子の死よ由りて神と和することを得たらんよは況て和を得たる今その生けるに頼りて救はるゝことを得ざらんや(羅馬五の八、十)。

○無形體の敵と闘ふよ當りて落膽する勿れ乃ち憂悲困苦の間よ於て己の爲汝をして奸惡なる蛇と闘ひ己の爲時々刻々傷つけらるゝ境遇よ立つことを得せしめたる主を讃揚せよ、蓋し汝若し敬虔の生活を爲

し神と体合せんと努むるよ非ざれば敵も恐らく汝を攻撃し汝を苦しめざるべければなり。

○全能の力よ爾救世主よ光榮を歸す、在らざる所なき能力よ爾救世主よ光榮を歸す、至仁なる胎よ爾よ光榮を歸す、我れ困苦める者の祈禱を聞き、我を憐み、我を我が罪より救はんがため常よ啓ける耳よ、爾よ光榮を歸す、常に慈愛を以て我を鑑み、我が隱秘を悉く洞見する炯々たる目よ、爾よ光榮を歸す、最愛のイエス、我の救者よ、爾よ光榮を歸す、爾に光榮を歸す、爾よ光榮を歸す。

○吾人の智の光は極めて限りあり、己よ多く智慧の光を容るゝこと能はざるを以て心裡の信は人よ必要なり、而も主神は無限の大光よして

世界は彼れの全能及び睿智の微々たる滴たるに過ぎず、是れ吾人が己の泥土的の体よこれより多く容るゝこと能はざればなり。

○地は縦令太陽の周囲を繞ること甚だ速なりと雖も、堅くして且つ鈍し、水は柔軟にして流るゝこと速なり、故に急流と云ふことあり、空氣に至りては一層柔軟、一層細微、一層迅速なり、故にその動くや例へば風の如き甚だ速なり。若し夫れ光に至りては、更に細微、更に神速にして、一時間、殆ど信すべからざる底の場所を通過す。若し天の光なるもの此の如く細微にして、最少時間中、斯く廣漠なる場所を通過すとせんに、は創造せられたるの靈は果して如何なるべきか、彼は如何に輕微神速なるべきか、遂に天の造られざるの神靈たる主其者は果して如何なる

べきか、彼れの測るべからざる果して如何、若し光なるもの一秒時間に斯く驚くべき程の速力を以て傳播すとせんには、造られざるの光、凡ての光と凡ての受造物との源泉たる者が造られたる有智の靈に傳はること如何に神速なるべきか、遂に夫の萬物を造りたる光が己の凡ての造物、此世の有らゆるものを包括すること果して如何なるべきか、非物質なる造られざるの光、斯世に來る凡ての人を照す(約翰一の九者)爾に光榮を歸す。

○甘んじて己の心よ撒但の重負を荷ふ者多し、されど之に慣るゝ深くして、往々之を感せず、尙甚だしきは知らず、識らずの間、之を増すことあり、然れども時として夫の惡敵が其重荷を十倍よすることあれば、彼

等は愛憎落膽すること甚だしく、怨訴神の名を誹謗するに至る此世の人々の醜を散ずる方法は、夜會骨牌、舞蹈、觀劇等を以て常とすされど此方法は後に至りて更其愛憎煩悶を増すのみ若し幸にして翻然神に向ふに至らば其心より重荷を脱して、曩に其心に至大の重荷横はりしを——自ら屢々之感せざりしと雖も——明知せん、嗚呼、活ける水の源なる主を棄て自ら水(活ける)を有たざる壞れたる水溜を掘る(耶利米二の十三)人々は何ぞ其れ多きや、この壞れたる水溜は甚だ多く概ね人毎之を有す壞れたる水溜は吾人の心、吾人の心、吾人の心、吾人の心、吾人の心なり。

○汝若し隣に欲點及び怨あるを見ればこれが爲に祈れ、各人の爲に祈り己の敵の爲にも亦祈れ、若し汝若しくは他人に對して傍若無人の振舞

を爲す傲慢不遜の兄弟を見れば宜しく之がため神に祈りて其智を啓發し、恩寵の火よて其心を暖めんことを求め、乃ち祈りて言ふべし、主よ、惡魔の驕傲に陥りたる爾の僕に諭すよ、溫柔謙遜を以てし、撒但の驕傲の暗と重負とを其心より排除せよと、又若し兇惡の人を見れば乃ち祈りて言ふべし、主よ、爾の恩寵よて此の爾の僕を化して善人と爲せと、又若し貪婪壓くなきの人を見れば乃ち言ふべし、我が朽ちざるの寶盡きざるの富よ、爾の像よ肖せて造られたるこの爾の僕をして、富の恃むべからざることを、斯世の事物の悉く虚たり影たり夢たるを悟らしめよ、凡ての人の時日は草の如く或は蛛網の如くよして、獨り爾は吾人の富なり安慰なり歡樂なり、嫉妬深き人を見れば乃ち言ふべし、主よ、この爾の僕の智と

心とを啓發し之をして爾の無量の恵に由りて受けたる偉大無數測るべからざる爾の賜を悟らしめよ蓋し彼は己の慾に眩惑せられて爾と爾の豊かなる賜を忘れ爾の賜よて豊富なるも自ら以て貧なりとし之よ由りて—オ、言ひ盡されぬ鴻仁よ—爾が各人よ其力よ超え爾の旨の欲する所よ従つて施與したる爾の僕の幸福を羨ひなり至仁なる主宰よ悪魔の被覆を爾の僕の心の目より剝ぎ取り之をして衷心痛悔し悔改の涙を垂れて爾に感謝するの念を起さしめ敵をして生ながら其意旨を虜よしたる彼の爲よ喜ばしめず之を爾の手より奪ひ去らしむる毋れど酩酊する人を見れば心竊よ言ふべし主よ腹と肉體の快樂よ感溺したる爾の僕を憐み之をして節制齋戒の味と之よりして生ずる

靈の結果とを識らしめよ又美食を嗜み己の幸福を以て之よ在りとする人を見れば乃ち言ふべし主決して朽つることなく永生よ存する吾人の最好の食物たる者よこの爾の僕を肉體をのみ肥して爾の神よ矛盾する饕餮の汚れより清め爾の體血及び爾の神聖よして活ける有効の言なる爾が施生靈妙の食物の味を識らしめよ—此の如く若しくは之よ類する言を以て凡ての犯罪者の爲よ祈り何人をも其罪のため侮辱し若しくは之よ復讐する勿れ是れ偶々以て犯罪者の傷痕を大ならしむるのみ乃ち其惡を絶ち若しくは之を適度よ抑留する方法たる忠告を以て脅嚇を以て懲罰を以て矯正すべし。

○二個の反對なる勢力は吾人の心よ其作用を及ぼし甲は頑硬よ乙よ

抵抗し強迫且つ狡猾に吾人の心は闖入して之を殺すを例とし乙は清  
 廉潔白よして不浄に遭遇する毎は自ら以て侮辱せられたりと爲し心  
 は微々たる不浄の萌すことあれば徐々之を去る而も此力吾人よ作用  
 を及ぼす時は吾人の心を安泰にし愉快ならしめ活潑ならしめ欣然た  
 らしむ即ちこの二箇の特性ある反對の勢力は由りて常は人間の兇殺  
 者たる魔鬼と常に施生者且つ救主たるハリストスの疑ひなく存在す  
 ることを知り得べし甲は暗及び死にして乙は光及び生命なり故に神  
 を愛する者よ汝若し時ありて智と心とを暗黒憂悲悵懣不信の如  
 き頑然神の信仰は反抗する勢力あるを感せば則ち汝の裡はハリスト  
 スは敵對する惡魔の勢力潜むと知れこの暗黒兇殺的の勢力は心の感

罪を経て吾人の心に潜み入るよ及び往々吾人をしてハリストス及び  
 聖人輩を顧ばしめず之を不信の濃霧中は隠蔽す是れ何の爲ぞ他なし  
 人を啗裂かんが爲なり何となれば信は吾人を彼の奸計誘策より救ふ  
 を以てなり然れども彼は之を以て偶々彼と相反するハリストス神の  
 全能力あるを證するなり彼は不信の醜よ由り吾人をして之に近かし  
 めずと雖も吾人信仰を起せば夫の全能力は之を以て彼を破り未來の  
 審判のため幽暗の鍵鎖を以て彼自身を束縛す猶太一の六故は吾人は  
 全力を竭して信を以てハリストス救世主を顧ばんことを努めざるべ  
 からず各ハリステイアニンは其求むる所何事も拘らず速に神に向て之  
 を求め弱者が諸の勢力及び諸の源泉に對するものとして感謝して己

が求むる所を神と告げ(腓立比四の六)凡ての事感謝し(帖撒前書五の十)七)常々「アリルイヤ」と稱揚する神使の如く讚美の言を以て求むるの習慣を養成せざるべからず。

○吾人の最も要する所のものとして、吾人が最も屢々祈禱に由りて神より受くる所の神の至大の賜は救主の言ふ如く心中の安和なり、曰く凡そ勞苦する者及び重を負ふ者は我より來れ我爾曹を息ません(馬太十一の廿八)とされば爾等安和を得たるときは喜んで自ら有らゆるものを所有する富者と思へ。

○人たる者は皆常々靈魂肉體共々神のものとして、靈身の凡ての需要より就き造次顛沛も神に關するものと記憶すべし、故に凡そ需要(靈身

の)を感ずる毎に例へば其靈魂若くは肉體の存在の窮厄に迫りたる時即ち憂悲を犯され(靈の病)若くは慾を惱まされ(肉體の病)たる時五行が其不順を以て之を侵す時(即ち火、水、空氣、暴風雨等)又凡そ事を企てんとする等の場合には常々必ず神に向ふべし、其時、際して人は必ず萬物を無より造り己の造物と種々雑多の事を行ふの諸種の能力を賦與したる惟一の造者のことを記憶すべし。

○凡そ善き思想の起るは是れ吾人の裡に神聖的、吾人の靈魂を薰陶する善良高尚の本原の存するを假定するなり、此事たる吾人の裡に那邊にか善の伏在するが如き氣味あるより由りて明かとして吾人が徒らに心中に會て其の有たりしが如きものを容れんと努むるのみ眞なる

哉使徒の言曰く爾何の未だ受けざる者あるか(即ち凡ての善意と凡ての天然の賜)爾若し之を受けたらんは胡爲ぞ誇りて未だ受けざる者の如くするか(哥林多前書四の七)。

○吾人は己の裡に信と不信との闘善力と悪力との争を感じ世には教會の精神と俗界の精神との闘争を見る此世に於て汝等は其精神より明々地に二箇の相反する方面を判別すべし即ち光の方面と暗の方面善と悪との方面教會的宗教的と世俗的不信的との方面是なり汝は何に由りて之を知るか二箇の反對の勢力即ち神の能力と悪魔の勢力の闘争よりて之を知るなり主は己に順從する諸子に其作用を及ぼし悪魔は信從せざる輩に其作用を及ぼすなり(信從せざる者の中は今

はたらく所の靈——以弗所二の二我も亦屢己の身に二箇の相反する勢力の相闘ふを感じ我起て祈禱せんとする時時として惡力甚しく我を壓迫し我が心を沈め之をして神より昇らざらしめんとすることあり○吾人をして神と合体せしむる方法(祈禱及痛悔)の確實有力たるだけ神及び吾人の敵の之に對して攻撃を加ふること益々烈しく之が爲め有らん限りの手段を用ふ即ち懶惰がちなる吾人の身體靈魂の虛弱地上の幸福及び思慮に戀々たる情衆人より最も多き猜疑薄信不信猥褻狡猾誹謗の念慮心中の苦惱思想の昏昧等敵は其作用を以て悉く之を不注意の人より加へ以て吾人を神より昇らしむるの段階たる祈禱に於て吾人を蹂躪せんとす是を以て赤誠熱心の祈禱者甚だ少く是を以て痛悔

領聖するハリストス・ア・ニン「甚だ稀なり若し國法を以て國民たる者も毎年告解領聖するを命ずるも非ずんば恐らく痛悔領聖する者其半も過ぎざらん是れ經驗したる者の皆能く知る所也。

○吾人の勢力吾人の靈魂は見るべからず動物も於ても同く其精は見えず植物も於ても其勢力其生命は見えず物質世界の存在し運轉するは皆見えざる力萬有の法則に依る夫の天上の村落は物質と異なる清淨なる天の能力あり在天のもの在地のもの上のもの下のもの皆悉く天地間の凡ての勢力を生じたる惟一全能の能力に歸す故に凡ての勢力は三位に於て惟一なる能力父及び子及び聖神を頌讚すべし此世に生を享くる者は殊に夫の到る處に生命と幸福とを擴充する愛の萬

事を連結する能力を頌讚すべし。

○聖神は由りて吾人の靈魂を堅めらるゝの必要なる所以は予之を明知せざるや久し然るも今や彼れ鴻仁者は我をして其の必要なる所以を悟らしめ給へり然り彼は實に我が存在する間片時も我に欠くべからざるものにして祈禱に於て生活上万般の事も就て我に必要なり我が靈魂彼に堅めらるゝことなくんば常に諸罪即ち靈の死に傾き易く彼れ靈魂は微弱と爲りて之に入る所の惡は由りて其力全く衰へ善を行ふの力消盡す聖神の堅めなくんば汝の心諸惡に掘穿たれ時々刻々其淵に溺れんとするを感すべし是を以て吾人の心をして磐の上立たしめんこと必要なり磐とは何を聖神即ち是なり彼は吾人の力を堅



凡人若し祈禱せば彼は其心を信と其求むる所のものを得るの望に堅  
 む、彼は吾人の靈魂をして神を愛するの心を起さしめ吾人の靈よ光明  
 善良よして智と心とを強固よする意思を吹き込み而して人若し各種  
 の事業を行ふに當りては其の労働の重要欠くべからざることを識認  
 せしめ并に有らゆる難事よ打勝つべき不屈不撓の忍耐を以て其心を  
 堅め、その貴賤たると男女たると拘はらず、人と交際するに當り其人の  
 何人たるを問はず、同じくハリストス神の血よて贖はれたる神の像と  
 して其人に對する尊敬の念を起さしめ時として其容貌及び衣服の甚  
 だ醜くきと、其言語應對の粗暴なることよ介意せざらしむ、彼は吾人を  
 在天の父の子として愛を以て悉く連結し、ハリストスイイスよ依り

吾人をして「天に在す我儕の父よ……と祈禱することを教ゆ。  
 ○汝試みよ夫の日月星辰の光の因りて出でたる近づき難き光を見、又  
 此世を永遠の苦より救はんとて己れの獨生子を此世よ遣はしたる無  
 限の愛を見、又此世の千差万別の状態と美妙乃ち木石、魚介、禽鳥、動物及  
 び人間の千差万別の状態と美妙とを見たりと想像せよ、又試みよ博愛  
 よして己れの徳の近づき難き光よ依り光輝赫灼たる天地の造物主を  
 目撃すと想像せよ、汝果して如何の感を爲すや、而かもハリストス教は  
 悉く吾人をして之を目撃せしめんとす、試みよ草木を見よ、夫の草木よ  
 は(一)草木の各部分よ睿智の散見するあり、又(二)草木の各部分に生氣を  
 與へ之を堅め、相當の關係よ之を保持する勢力と、(三)全能力あり無限の

睿智は此全能力を以て自然醜くき物質の形状を變改し之をして容易  
よ己れの無限の意思及び目的の用よ供せしむ主や爾の工作は何ぞ大  
なるや(聖詠九十一の六)爾の知識は我が爲よ奇異なり(全上百三十八の  
六)。

○此世に於て遠隔の場所に在るものは縱令其物大なりと雖も之よ太  
陽の光反射せざるときは遠方より全く見えず而して若し太陽の光反  
射するときは微々たるものと雖も遠方より見るを得べし人々の間よ  
於ても又猶此の如く義の永遠の光なる神が己れの徳を以て照さる  
人は近く隔たりたる場所よ於てのみ極めて少數の人の目よ觸るよ  
過ぎずと雖も若し之に義の太陽反射するよ於ては遠隔の地方より人

皆之れを仰ぎ見人皆之を讚揚し古今東西の人(即ち聖人)之を讚揚し甲  
は日の如く輝き乙は月の如く丙は星の如く輝くなり。

○余は神の造物を通觀し其の數限りなきを見て神の像と知識と自由  
と智を以て萬物を觀萬物よ於て睿智至仁なる造物主を驚嘆する才能  
とよ由りて自ら彼等數限りなきものよ上よ超然たるを見る嗚呼我は  
如何に我が造者の前よ敬肅すべきぞ嗚呼我が存在の因たる我が父我  
が母よ如何に我が爲よ尊敬すべきものぞ彼等は時よ於て現世の爲め  
及び永遠の爲め我よ存在を與へ母の胎内よ我を造れる神の旨よ由り  
て此世の莊麗なる宮殿よ導き入れ期よ臨み造物主をして我を天の宮  
殿よ導き入れしめんとす。

○國家若くは何等かの社會は即ち一の身體なり。身體に於て諸肢は相  
借に又箇々單獨に神に依りて己の位置に立てられたる如く社會の身  
體に於ても神に依りて各其位置に立てらるる加之各人の事業も亦彼此  
の位置の因たるなり。

○光の天より地に注射するは人の皆實見する所なり。蓋し日月星宿天  
よりして吾人を照せばなり。此事たる非造有智の光——吾人の主神の特  
に天に在すこと并に物質的と神靈的の光智と心の光の皆彼れよりし  
て吾人に降ることをも示すなり。彼は世に來る凡ての人を照す眞の光  
なり(約翰一の九)神は即ち愛なり(約翰第一書四の十六)凡そ愛を破り仇  
讎の念を植るを主眼とする意思感情心地は是皆魔鬼より出づるもの

なり汝宜く之を心裡に銘して極力愛を保たんことを努めよ。汝等愛を  
追求めよ(哥林前十四の二)汝の須らく慎むべきは肉体的舊人的有罪的  
の人を反することを實行し畢生之に逆ふて進行するに在り。是れ汝が  
生涯の目的として併せてハリストス、イエスに於ける汝の榮なり。夫  
れハリストスは屬する者は肉と其情及び慾とを十字架に釘たるなり  
(加拉五の廿四)猶汝の心に銘記すべき眞理あり。吾人の全く憎むべき所  
のものは惟一即ち罪若くは慾のみとして人々を對しては専ら愛を注  
げと云ふ是なり。王法昭々たり曰く汝の隣を愛すること己の如くせよ  
(馬太廿二の三十九)。

○祈禱の時悒鬱煩悶汝の心を壓する時は乃ち祈禱に於て汝を妨げん

と務むる魔鬼の所爲なりと知れ汝宜く毅然猛然神のことを記憶するを以て其の懊惱たる感情を一掃せよ敵は思想も非ずば心よて屢々全能なる神の名を誹謗せしめんとす汝宜く注意すべし神よ對する心の誹謗とは何ぞ疑惑不信憂鬱怨嗟神の罰を耐忍せざることを等諸般の怨なり神の眞理及び仁慈よ對する不信を以て敵は神の眞理と仁慈と全能とを誹謗せしめんとし憂鬱を以ては彼れの仁慈を誹謗せしめんとし總体人間の情慾を激發せしむるを以て神の至仁なる照管と眞實なる事を誹謗せしめんとするなり。

○全世界よ於て凡ての物体よ於て要戲を演ずる者は無形的のものよして無形的のもの一たび其物体を去る時は其物生氣を失ひて破壊し

了り即ち諸物体よ於ける有形的のもの一たび無形的のものど相離るゝよ於ては一箇の土塊たるよ過ぎざる所以を汝の智と心と銘記せよ予及び凡ての人間は無形的の本原——神よ由りて生活するなり。

○神のこと自己のこと己の救贖の敵のことに關する無知の闇は諸人を掩蔽す故よ夫の敵は吾人の靈魂の無形の家其の無形の財を掠め去ること甚だ易なり。

○内の人よ向て「寢たる者よ目を醒し死より起きよ」以弗五の十四と云ふは是れ通常肉体の眠に酷似したる靈魂の實際の睡眠を指して謂ふなり又我が靈魂よ起きよ何ぞ寢ぬるやと云ふも亦是れ靈魂の實際の睡眠を指すものにして單に譬喩的と言ふも非ず身体睡眠する時は萬端